

古事私記 (古尾張往来記)

昭和の初め頃、一宮の土川さんが、真清探当証を根尾村に持参して写本を頼まれたが残念なことに完成前になくなられたとゆうことです。

平成十一年根尾村文化財保護審議会の許可を得て、田中豊氏（前一宮市立北方中学校、校長）が真清探当証復刻版を出版されました。

真清探当証復刻版を読んだが、理解できない点や同じことの繰り返しで判りにくいので、勝手に解釈しました。今回は尾張神代伝説のみとし、全編は機会があったら？——

真清探当証復刻版 尾張神代伝説 P.149 より

始め尾張の国は浅い海でした。

海部中島という海に接する土地を埋めて、新田を作り、耕地としてだんだんと土地を増やして現在の尾張が出来たということです。その尾張一の宮の物語です。

太古の神代の頃、いつ頃の事ははっきりしませんが、大体二〇〇〇年以上前か、それより、むかしのことかと思えます。

尾張一の宮の地を平定して、南の木曾分流、石野^{せき}磯に城を作り統治しました。

創世者の若い頃は、鬼神も恐れる勇者でした。年老いてからは、臣下に総てを任し城より北西よりに別荘を作り移り住みました。

しばらくして、各地の住民は反乱、臣下は乱脈、それで日夜悩んでいました。この時、大神オオヒルメノミコトは、まずは首長と相談して、天下を統治しようと思った。

秋の半ば八月十四日夜、大潮と月夜を利用して現在の尾張知多郡大野辺りの海より大神主従、順風南から吹くとき、帆の力で十数里の水路を北へ進みました、初めて村落が見えたので下船、村落付近まで歩み四方を眺めました。「これは目的の所ではない」

後年、この地をおりずとした。現在の尾張国中島郡下津村のことです。

そして再び、乗船しました。夜明け近く潮が満ちつつある河海を目的地近くまで進みました。この時船中より城が見えたので一同、無事到着を喜びあいました。

着船地は、神明津としました。神明渡ともいいます。

船夫は飛び降り船綱を磯の辺りの大松に結びました。大神主従は上陸されました。幸いここに床几に似た石があり、これを腰掛けの代わりにされました。

この下流に石野磯あり、木曾川の分流なるも、潮水遡り、常に舟転覆するため浜の

名前があります。故にこの浜に、舟繋ぎの松、(度々枯死するので後継の松を植えた)の跡があります。大神の休まれた腰掛け石は、この浜神明社(現在一宮市桜一の十六)にあります。

大神はこの石に腰を下ろし、東南を眺めながら、「嗚呼、^{おはり}小波里かな」といいました。

これはこの夜順風、波静かなる海河共に平穩なるの言葉、このときからこの国は、小波里(おはり)という国名になりました。

「どこへ上陸しましょうか」

大神は言われました。「汝らの知るところではない、^{わたし}妾が命令するまで待ちなさい」

猿田彦命に下命、「首長は、今城か、隠居家か、朕が面談したいと伝えよ」

猿田彦命が出発準備中のところへ、大神主従が御巡視の為、上陸されたことを知り、直ちに使者をだし、隠居家へ案内しました。

大神を奥殿へ招いた首長は、大神の威風堂々たる姿、容貌目付きなど、世を治むる相と器量を見て「これは、ご立派な方！」と一目で思いました。

「われ、長い間この国を治めてきました。しかし、今は年老いて国を治め難くなりました。そして、国を継ぐ息子もいません。大神、これを継いで下されば、すぐに引退します。」 涙ながら大神になんども頼みました。誠意あるその態度に、
「汝の願いを聞き入れましょう」

首長は、大神に大権職を譲り、先祖伝来の宝物名鏡と首飾りを奉獻しました。

宝鏡は^{やたのかがみ}八咫鏡、首飾りをやさかにのまがたまと名前をつけました。

大神は宝物を受け取り、老人に^{ほあかりのみこと}火明尊の尊号を与えました。

大神は「今後は兄妹の盃を酌み交しましょう」と言われました。老人大いに恥じ「私はただ、ただ、年を長ずるのみです。私の為をお思いになるならば主従の縁を戴きたい」と双方共、容易に譲りませんでした。最後は親戚にと話がまとまりました。

老人は娘婿による孫娘、十五、六歳 天下一の美人、何処にも欠点のない女子を供応係りにしました。大神は大いに満足されました。孫娘は大神の命令通り何事も速やかに成し遂げるので益々気に入られ、主従の縁を結ぶため祝杯を傾けました。

「汝を豊とする。帰って両親と相談しなさい。」

容貌豊かな相、万事に満ち足りることをあらわします。

豊姫、豊姫といわれました。故に大神は女の臣を抱えたという意味で、これを姫と呼ぶようになりました。

豊姫は大神より祝杯を受け、急ぎ帰宅、両親に一部始終を話しました。両親は早速承諾。土産物献上の協議をした結果、御旗なきを思い、さらし木綿と赤染め木綿で幸い八月十五日により、月も太陽も丸く、二流の御旗に夜を徹して縫い上げました。

大神が松降の浜に上陸以後、村人へ巡視の知らせがありました。ここは木曾分流する小川があり、降雨の際は洪水、平時は水浅く、舟では渡るのは難しいので、中央に丸太橋を架けました。が大神と火明尊と講和、首長職襲の宴開催のため、村内巡視は取りやめになり村人の苦労は無駄になりました。一方、豊姫は紅白二流の旗を捧持し、両親、親戚知己等とこの橋を渡りました。

それ以来何処の渡橋式でも、親父母、子夫妻、孫夫妻と三夫婦揃って初渡りするようになった。この橋の名前は幡橋、後年わた橋と言いまでもあるそうです。

これより豊姫は大神に忠勤、飲食一切は豊姫の毒味が終わらなければ、何時までも箸を取らず、大小事も大神独断にて行わず、万端、豊姫に相談の上決しられました。ある時大神は諸所巡視中、御旗の縁取りがほつれたが大神怒られず、自ら小針にて縫われました。

先に小波里、今回の小針、次に南の方、現在の知多郡が張りだしている。方向は北を頭に、南を尾になぞらへ、尾張と改めました。この国名 今でもあります。

豊姫は大神の侍女として、いつまでも奉仕しました。

その後、火明尊は老病に罹り亡くなった旨大神に達し、生存中の功を、嘉し特に火明尊の祖先國常立尊を合祀、黒田大神と尊崇し、隠居地に奉祀、造宮、鎮座しました。尾張國一ノ宮は、全国一の一ノ宮です。

豊姫は大神崩去後、霊を丹波に奉祀、この地に永住し亡くなりました。

後年、丹波より伊勢の国に遷宮の時、大神を内宮として奉祀、豊姫を豊受大神宮とし神号を外宮としました。

豊姫誕生地の村民は、功績を記念して、村名を神戸^{かんべ}、在所を宮山^{みややま}、大神の毒味役により、酒見神社。豊姫初仕えの日、八月十六日を祭日としました。尾張國中島郡本神戸村字宮山に御鎮座の酒見神社のことです。

時代に翻弄された奇書

(ますみたんとうしょう)

「真清探當証」

2002-3-23 關シティ・ワン

ある日、名古屋市在住の古代史研究家・小椋一葉（かずは）さんは1通の手紙を受け取ります。差出人は岐阜県在住の晴徳暁照氏。その手紙には「真清探當証」（ますみたんとうしょう）を世に出してほしいという熱い思いがあふれていました。晴徳氏は根尾村にある願養寺の元住職で、「真清探當証」の原本を書写した人物です。



根尾村に伝わる「真清探當証」の写本と小椋一葉著「継体天皇と うすずみ桜」 河出書房新社刊

清徳氏によると、昭和八、九年のころ、一宮から土川氏が根尾へやってきて、家伝の古記録に「根尾の淡墨桜（うすずみざくら）は継体（けいたい）天皇のお手植え」と書いてあると言うのです。根尾村役場は驚愕します。桜は、根尾の豪族・根尾氏の遺したものとわれてはいましたが、まさか天皇のお手植えとは…。しかし、戦前のこと、天皇家とかかわるものはそれ相応の敬意をもって接しなければなりません。そこで村役場は清徳氏

にその古記録、「真清探當証」を書き写すように依頼したのです。残念ながら原本はその後消息不明、清徳氏の写本だけが現在も村役場に保存されています。

小椋さん内容を一読、当惑します。「日本書紀」や「古事記」とは相いれない、古代史を研究する者にとっては偽書と決めつけるのが普通でした。しかし、小椋さんは「真清探當証」成立の裏に何かあるのではないかと、調査を始めました。結果、地元の一宮でも「真清探當証」を裏づけるものは何も出てきませんでした。「その何もない」という点こそ、「消された記録があったのではないか」と小椋さんは見えています。そして男大迹王（後の継体天皇）を養育したのが物部氏であり、蘇我氏とめ鬨に破れたあと、蘇我氏によって功績を奪いとられたのではないか、というのが小椋さんがたどり着いた説でした。はたして「真清探當証」は偽書か否か。真実は歴史の闇におおわれて、いまもどこかに眠っています。

継体天皇の謎

2002-3-23 關シティ・ワン

男大迹王“おとおう”（継体“けいたい”天皇）が一宮で生まれたいきさつを、小椋さんの「継体天皇と うすずみ桜」から「真清探當証」（ますみたんとうしょう）のその部分をかいつまんで書いてみます。

従兄弟の眉輪王（まよわおう）に殺された安康天皇の弟、大泊瀬幼武王（おおはつせわかたけおう）（のちの雄略天皇）は、安康天皇がかねがね皇位を託す

つもりの市辺押磐皇子（いちべのおしはみこ）を狩りに誘うと見せかけて謀殺してしまいます。

市辺押磐皇子の子、億計王、（おけおう）弘計王（をけおう）は変を知った臣



木曾川町黒田にある「護国権平神社」この社名も二皇子がここで一夜を明かしたことに由来するという。

下たちにより、大和から逃げださざるを得なくなります。「真清探當證」では、尾張黒田神宮へ向かうことになっています。

この黒田神宮とは真清田神社の古名で、真清田神社にあと少しというところで野宿をした夜、近臣が旅に疲れた皇子たちをなだめるために窮余の作として「ここが黒田です」と答えてしまったために本来の黒田神宮を「真」の黒田神宮、「真黒田神宮」とつくろわなければならなかった、と書かれています。

それがのちに「真清田神社」となったと

いうわけです。

尾張での潜伏中に、弟の弘計王に子供が誕生します。それが男大迹王（のちの継体天皇）で、雄略天皇の追跡を逃れるために、乳母夫婦とともに一宮から根尾村へと旅立ちました。

この乳母の夫は、のちに物部の姓を賜って物部尾越と名乗り、物部氏の祖となったとされています。

男大迹王は根尾村で育ち、伯父の仁賢天皇の時代に根尾から大和へと移りました。

その根尾を去るときに、真黒田神宮へ参拝したおりに持ち帰った桜の苗を植え、

身の代と遺す桜は薄住よ

千代に其名を栄盛へ止むる

と詠んだということです。それがいまの淡墨桜となったのです。

日本書紀・古事記（以下紀・記）には、たしかに雄略天皇による市辺押磐皇子殺害による、二皇子の逃亡も描かれています。しかし、2人は播磨国へ逃げたことになっています。しかも、継体天皇と二皇子は血のつながりはありません。

その継体天皇という人物は、日本の古代史の中でも謎をはらんだ人物とも言えます。まず「応神天皇の五世の孫」という出自がはたして本当なのか、という疑問。「紀・記」では武烈天皇の血筋が絶えたときに、大連（おおむらじ）の大伴金村が継体天皇を越の国から迎えたことになっています。三代前の雄略天皇が親族を殺して、後継者が少なくなっているということがあっても、はたして「五世の孫」にあたる人物が皇位につけるのでしょうか。

しかも、即位してから大和に入るのに20年もかかったという点も不思議です。継体天皇の代には九州で磐井の乱も起きていますし、継体天皇を迎えた大連（お

おむらじ) の大伴金村という人物は、軍隊を掌握する地位にいた人物で、クーデターがあって継体天皇は錦の御旗にかつがれたのではないか、とか、日本海に面して大陸とのつながりがあった越の国から大和王朝へ王権を奪いにやってきたのではないか、とかさまざまな説が言われています。

継体天皇の縁戚関係から見ると越前から美濃、尾張にまで勢力を持っていたことは確かなようです。

継体天皇の妃に尾張連 (おわりのむらじ) の娘、目子媛がおり、尾張連は当時尾張から美濃にわたって大きな勢力を持っていましたから、継体天皇は目子媛と政略結婚 (か、どうかわかりませんが) をして尾張の勢力を手に入れた、とも言えます。事実、彼女が生んだ子があいついで皇位に着いたところを見ると、尾張連は相当の勢力を持っていたのは間違いないでしょう。

「継体天皇が一宮の桜を根尾村にお手植えになった」という伝説が真実か否か、「真清探當證」という本が偽書かどうか、それは尾張から根尾村を通り、福井へと続く道だけが知っているのです。

継体天皇民話

松波 逸雄 2002-3-23 備シティ・ワン

およそ千五首午くらい前のお話です。ここ猿海道の地 (一宮市舟陽町猿海道) に、ケンソウ (顕宗) 天皇 (幼名ヲケ王) のお妃であったトヨヒメ (豊媛) のお住まいがありました。

トヨヒメの父はアタヒコ (吾田彦) と呼ばれ、オケ王とヲケ王の守り役でした。

二人の父である、イチベノオシハオウジ (市辺押磐皇子) が大和の政権争いでユウリヤク (雄略) 天皇に殺されたとき、幼い二人を護って、尾張の真黒田大神宮の地へ隠れ住むことになりました。

ヲケ王が二十一オの時です。トヨヒメと結ばれてオオド王をもうけました。

しかしその当時はまだ大和の追求が厳しく、オケ王・ヲケ王を護るに手一杯であったために、生まれてまもないオオド王は家来のソウヘイ (草子)・おなみ夫妻に護られて遠く根尾の地に隠れ住むことになりました。

この事はごく一部の家臣が知るのみでトヨヒメにも知らされませんでした。

トヨヒメは、第二十二代セイネイ (清寧) 天皇が崩御され、ヲケ王が大和から迎えがあったとき、泣く泣く別れました。村人たちはフリヒメ (振媛) と呼び、なにくれとなくお世話をしてくれました。

トヨヒメは離別きれましたが、真黒田大神宮 (現在の真清田神社) に日参し第二十三代ケンソウ (顕宗) 天皇となった夫の政権の安泰と、オオド王の成長を祈願していました。

毎日、申 (さる) の刻にお屋敷を出発していたので、いつとはなしにトヨヒメの通う道を申海道と呼ぶようになりました。現在も猿海道の名はその名残です。

蒸し暑い六月のある日のことです。真黒田大神の前で熱心にお祈りをしていたときのことです。辺りがほんのりと薄く暗くなりました。ふと社殿に目を向けると、うすあかりの社殿に、おさない男の子を抱いた立沢な武士が立っています。

どなただろう。目を凝らしてみると十年くらい前に、なくなった父のアタヒコ（吾田彦）ではありませんか。

『お父さんだ』 『父がどうして此処に』 『抱いている幼子は』

『私の子どもは、もう立沢に成人しているはずだ』

『でもあの幼子は？』 『私の子ども、オオド王に聞達いない』 『お父さん！』

トヨヒメは必死で呼びかけ、近づこうとしよした。

武士はそれに答えず、くるりと背を向け、社殿の奥に歩き始めました。

大声で呼び近づこうとするが、声も出ず、体も自由がきかなく一歩も進むことができませんでした。

声にならない声を張り上げ必死にもがくトヨヒメには答えず、武士は社殿の奥深く消えていきました。はっと、目が覚めました。

侍女が心配そうにのぞき込んでいます。

汗びっしょりで、手は固く握りしめています。

夢であったか？ 真黒田大神のお告げではないか。

オオド王は立派に成人しどこかで、私に合う機会を待っているのだ。

ぜひ会いたい。何とか探し出す、方法はないのか。

夜の明けるのをまった侍女にわけを話し、昔大和からオケ王・ヲケ王に従ってこの地に隠れ住んだ人々の沢山いる守基（森本）の地を尋ねさせました。

なにしろ三十年も前のことであり、ごく限られた人達だけの間で話し合われたことであつたので、知る人もありませんでした。

あちらこちら知り合いをたどり尋ね歩きました。

そんな頃、第二十四代ニンケン（仁賢）天皇（夫の兄のオケ王）が、先の政変で全国各地に隠れ住んでいるゆかりの人々に大和に帰るようおふれを出しました。

その知らせは真黒田大神宮や、オオド王のところにも届きました。

オオド王はその知らせに徒い、準備が整ったら大和へ帰ることにしました。

大和への出発にあたり、草子・おなみ夫妻はオオド王の前に正座し、

「大和からの追求を避けるために、今まで固く口を閉ざしていましたが、オオド王あなたは先のケンソウ天皇の御長子です。こたび大和へ帰るようにとの知らせもその為です。

「母はトヨヒメで尾張の真黒田大神宮の近くに健在です。

「トヨヒメの父アタヒコは、オケ王・ヲケ王の父であつた、イチノベノオシハ皇子の近臣で、本当の名前はヒコウシオウ（彦主人王）といいました。応神大皇の五世の孫にあたる立派な身分でしたが、大和に知れることを恐れ、仮りの名前であなたの両親を護ってきたのです」

「秘密を語ることなく、世を去ってもう十年にもなりますが、今日の事を聞きさぞ喜んでおられることでしょう」

と、オオド王の出生のこと、いままで秘密にしていた訳を諄々と話しました。

オオド王は大変驚いた様子でしたが、いままでに何度も、なにか隠されたものがあるとは感じていました。

しかし、懸命に尽くしてくれる草子・おなみや、家東のカネヒラ（兼平）に気兼ねし聞きただす機会を失っていました。

ややあって、オオド王は、

「大和に帰る前に真黒田大神宮にお詣りし、今日までのご加護のお礼をしよう」

「そして、私を抱くことなく寂しい思いで今日まで過ごした母に会おう」

「できたら母と共に大和へ帰ろう」

早速、尾張一官の真黒田大神宮へ出発する事になりました。析からの雨で増水した川づたいに根尾を出発しました。

この知らせは、オオド王の使いによって真黒田大神宮のもとにも、トヨヒメのもとにも届きました。

トヨヒメの見た夢は、毎日毎日、お願いしていた真黒田大神のお告げであったのです。

わが子オオド王に逢える。トヨヒメの喜びはどれほどでしょうか。

真黒田大神宮の神官たちもお迎えの準備を始めました。

トヨヒメの住む村ばかりでなく、オオド王通行の沿道の村々でも、歓迎の相談で大変な騒ぎになりました。

津島神社へお参りした一行は、おとがわ（乙川）現在の五条川からえんばがわ（縁菜川）せんげんぼり（千間堀）へと舟を進めてきました。

岸边では歓迎の笛太鼓等を鳴らし、ご乗馬の準備も整えて一行を迎えました。現在むかえ（向江）はやしで（囃出）こまよせ（駒寄）などの地名として残っています。

母トヨヒメは、村人たちから寄せられた小麦粉でうどんを作り、オオド王一行をもてなす準備に余念がありません。いつも食事の準備は侍女たちの役目ですが、今日ばかりは他人の手を借りずに自ら作りあげました。

オオド王はあずら（吾髪）の地、きたかた（北方）に駒を進め、母トヨヒメの離れを宿として落ち着くことになりました。

門前まで出迫っていたトヨヒメは、立沢に成人したオオド王の姿に喜びを隠すことが出来ませんでした。

オオド王は根尾で織りあげた織物などを母に贈り、一行はトヨヒメお手作りのうどんの接待を受けました。

三十年に及ぶ永い永い苦勞の話は尽きることなく、遅くまで明かりが消えませんでした。

この日にうどんを食べる習慣は、村人に広まり永いあいだ続きました。

準備を整えた一行は、途中すさきちょう（須崎町）一現底の大江二丁目一の八剣社で衣装をただし、真黒田大神宮の神官の先導で無事お礼参りを終えたと

のことです。

起街道

くれよん 23-5月号 平成14年4月25日

皆さんは尾西市を東西に通る「起街道」という道をご存じですか？ 名前は耳にしたことがある、もしくはよく利用しているなんて人も多いのではないのでしょうか。

今回はそんな起街道の歴史について調べてみました。

江戸時代、起は美濃路の宿駅として非常に栄えていましたが、明治19年東海道線の開通により、交通の中心は一宮へと移り、そして、明治から大正にかけて新しく一宮と起を結ぶ「起街道」がつけられました。

大正3年には、起←→一宮間に鉄道をつくるという計画がもちあがりましたが、実現することはありませんでした。しかし、大正13年に路面電車が「起街道」の上にひかれたことで、人々の交通は便利になりました。

昭和に入って、道路が本格的に整備され、交通手段も昭和28年に路面電車からバスへと変わっていきました。

ちなみにこの「起街道」は「電車通り」「五間通り」(幅約9m)などと呼ばれていたんだそうです。

この「起街道」には長い歴史と人々が起という街を変わらず愛する気持ちが今も昔もたくさんつまっているのですね。

【資料提供】 尾西市歴史民俗資料館 0586・62

・9711

木曾川今昔物語

美濃郡代と木曾川治水

かわなみ通信 Vol.7



美濃郡代笠松陣屋・笠松県庁跡 (笠松町)

1868年、200年続いた笠松陣屋は笠松県庁に、1871年に岐阜県が誕生し、2年後に県庁が岐阜市に移転するまで、笠松は岐阜県庁の中心地であった。

治水行政の拠点・笠松陣屋

古くから木曾川の水運に恵まれ、交通・経済の要衝として発展してきた岐阜県笠松町。

江戸時代から明治時代初期にかけて、美濃国内の幕領(幕府直轄領)を管轄する美濃郡代(代官)の陣屋が置かれ、政治の中心地ともなっていました。関が原の戦いのあと、幕領・大名領・旗本領が複雑に入り組み、数多くの領主によって分割支配されていた美濃国にあって、この「笠松陣屋」は、幕領を守るために1662年に設置されたものです。また歴代の郡

代にはもう1つ大きな職務がありました。美濃の治水行政です。

笠松における美濃の治水行政は1650年に始まります。この年の9月に起きた洪水被害の復旧工事を指揮するため、時の美濃国奉行・岡田将監善政（おかだしょうげんよしまさ）が笠松に休憩所（仮陣屋）を置いたのです。善政は、1660年に治水の功労が認められ、幕府の財政・民政の要職についた人物。美濃の治水事業に残した功績はたいへん大きなものでした。

洪水の復旧工事は、巨額の費用とぼう大な労力を必要とするもの。善政は、領域を越えて大名・武士に普請役を課する「国役普請」（共同で公益事業を行うこと）の形態をとり、幕領、私領（大名領や旗本領）のへだてなく工事を進めさせます。そのなかで、美濃独自の規定をもった「濃州国法」（のうしゅうこくほう）を成立させたのです。この制度は、善政とその父・善同（よしあつ）の将監親子二代に渡って確立されたことから、「将監定法」（しょうげんじょうほう）とも呼ばれ、明治にいたるまで美濃の治水制度の基盤となりました。

濃州国法のもっとも大きな特徴は、治水工事で人足役として駆り出される農民の負担を軽減した点にありました。国役普請とはいえ、実際には村々に一定の割合で人足が課せられ、結局は農民が負担することになります。

手本となった「濃州国法」

ここに治水政策の矛盾が生じていました。農業収入の安定を図り、ひいては幕府財政を安定させるために行われる治水工事が、一方で農民たちに過重負担を強いるために、結果的に農業収入の減少となっていたのです。この矛盾を少しでも解消するために定められた制度の1つが、人足負担の代わりに工事資材を納入することを認めた「代人足制」。将監親子が美濃国奉行として美濃全域に渡る治水現場を渡り歩き、農民たちの過酷な現状をつぶさに見、その実体験を反映させたのでした。濃州国法は、当時としては最良の制度であったとされています。

その後、笠松の休憩所が陣屋となったあとも、この濃州国法は、治水行政の基盤となったのです。

木曾川今昔物語

信長の天下統一を支えた川並衆

かわなみ通信 Vol.8

戦国時代、木曾川を舞台に活躍した武装集団がいました。その名は「川並衆」（かわなみしゅう）。

長らく歴史の陰に埋もれていた彼らの存在が、江南市の吉田家の土蔵から見つかった大量の古文書と、各務原市、犬山市、江南市、岐南町、川島町の市長、町長や川並衆の子孫の寄り合いによって、現在、少しずつ明らかにされてきています。彼らこそ信長を、そして秀吉を歴史の最前線に送り出した、知られざる立役者だったのです。

木曾川は戦国時代の高速道路

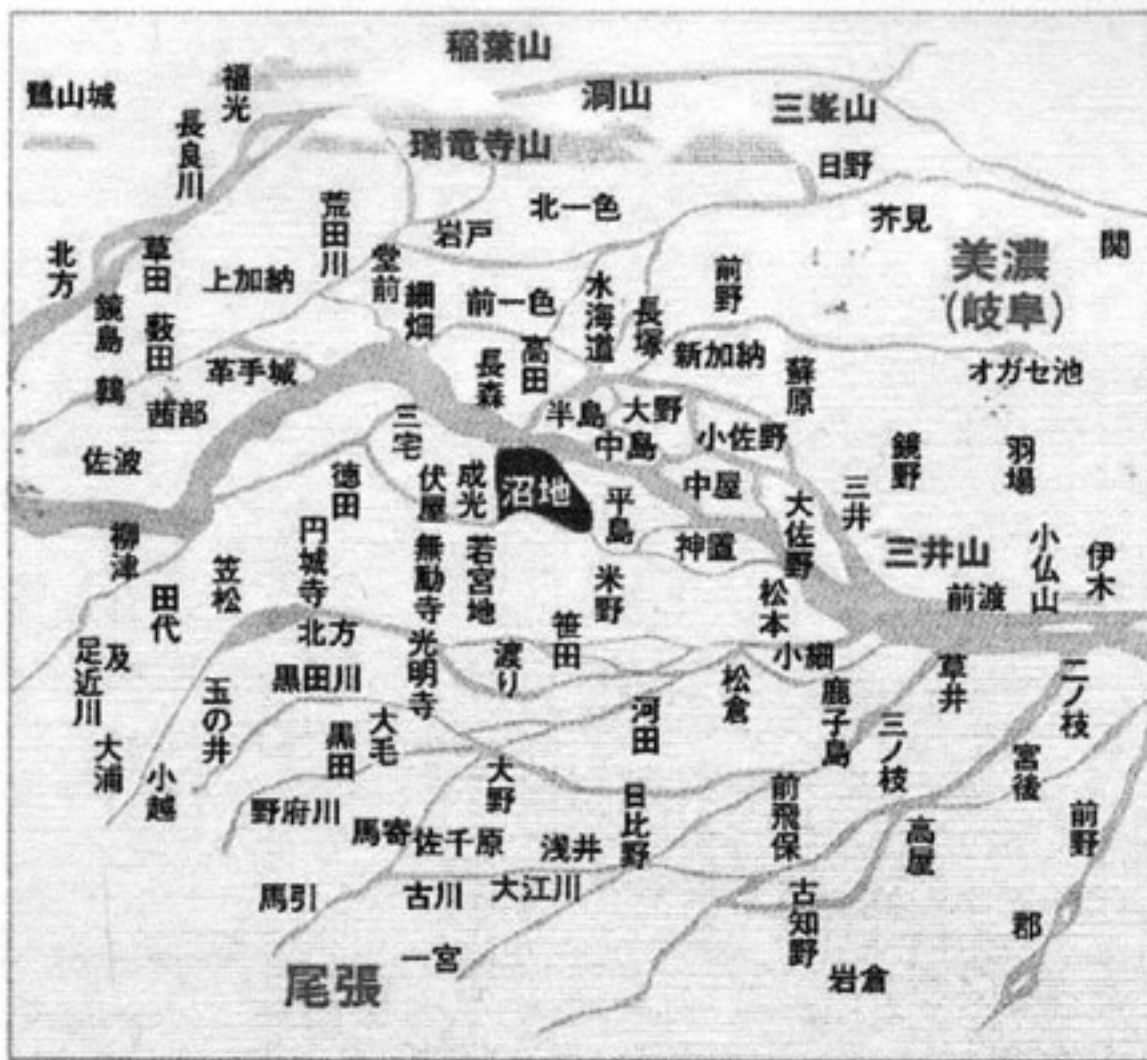
信長が生まれた頃、木曾川本流は革手（かわて）、三宅（現岐南町）あたりを流れていました。しかし何百年の間に玉石や土砂がたまり、洪水のたびに流れきれない水が上流の犬山付近までさかのぼり、その濁流は尾張国に垂れ流れるように入って、一の枝二の枝、三の枝と、いく筋もの支流を作りました。

洪水の被害という面では非常にやっかいな支流も、当時のこの他城の物流には大きな役割を果たしました。大きな川に橋を架ける技術がなかった時代、陸路を使うよりも無理なく圧倒的に早く運べる川の航路は、まさに現在でいう高速道路。いかだや帆掛舟を縦横無尽にあやつり木曾川の航路を統治していたのが、船頭の頭である蜂須賀小六、前野将右衛門、坪内宗兵衛、松原内匠ら「川並衆」だったのです。

その大河の流れと川並衆を活用して財をなした人物が、尾張の郡村（現江南市）の油商人、生駒八衛門です。生駒は、主に夏に起こる洪水によって運ばれてきた肥えた土に9月頃菜種をまき、菜の花から絞った油で行商しました。

油に火をともし、明かりをとらでいた当時、川運で運ばれた生駒屋の油は各地や大当たりします。その生駒の用心棒だったのが川並衆を取り仕切っていた蜂須賀小六。そして生駒の富を頼り、日々生駒屋敷に出入りしていたのが信長で、信長の政商としての役割を担うようになった八衛門は、川並衆に信長への協力を要請します。

※吉田家……川並衆の一人、前野将右衛門の子孫。古文書は1959年伊勢湾台風で崩れ落ちた土蔵から見つかった。古文書については、さまざまな立場からの議論がある。



往古の木曾川の流れ。地名については、現在の名称で表記したものもある。
(出典：『藤吉郎と伊木清兵衛』松原清史 著) 提供：木曾川上流工事事務所

川を制する川並衆を味方に

天下統一の足がかりとして、美濃攻略が必要だった信長。しかし彼の代になって織長家は3つに分かれ、美濃への足がかりとなる犬山城は織田一族でありながら信長と敵対する織田信清の城。この犬山攻めと、同時に川向こうの美濃

の鷺沼城、伊本山城の攻略を信長は考えます。しかし当時わずか1500ほどの兵力しかなく軍備も枯渇状態。戦えばとても勝ち目のないことは明らかでした。

ところが、伊木、鷺沼とも無血開城という驚くべき勝利を信長はおさめます。ここに川並衆の力がありました。川並衆は、その集合体としては2000を超える兵力。さらに伊本山城の城主・伊木清兵衛は、実は川並衆の一人だったのです。美濃、尾張と国の遠いはあれ、川筋の豪族城主たちは川で生るものとして友情は非常に厚く、伊木は蜂須賀小六などの説得によって無血開城を決めます。これをきっかけに犬山、鷺沼を攻略した信長は、その2年後、美濃の川並衆・松原内匠などの力によって墨俣一夜城作戦を成功させ、一気に歴史の表舞台へ登場していきます。

戦国時代、尾張と美濃の境を流れる大河は、美濃の斎藤家のものでも尾張の織田家のものでもなく、まさに川並衆の世界。彼らを味方につけたものが天下取りの運を得たのです。

木曾川今昔物語 弥生時代のムラ「猫島遺跡」 集落跡がくっきり

かわなみ通信 Vol.9



集落を囲む環濠がはっきりとわかる「猫島遺跡」(千秋町地蔵)

名神高速道路尾張一宮パーキングエリア(名古屋から西行)の下に、およそ20000年前、弥生時代中期の集落跡が眠っていることをご存知でしょうか。パーキングエリアの新設工事に伴い、1997年、愛知県教育委員会による調査で見つかったもので、所在地の小字名をとって「猫島遺跡」と名付けられています。

このムラ跡のあたり一帯は、豊かな水田地帯。有史以来、木曾川やその支流による幾多の洪水が、何もかもを根こそぎ押し流し、削り取り、あるいは土砂で埋

め尽くした結果できあがった濃尾平野の特徴的な低地の景観です。地理用語で「氾濫原」と呼ばれるこうした低地には、いまだ知られぬ遺跡が、数多く眠っているとされています。猫島遺跡も、このような未発見の遺跡の一つでした。

1999年5月～2000年8月にかけての本調査で現れたのは、長さ200m程度の楕円形の二重環濠(かんごう)に取り囲まれた集落で、標高7～8m前後のわずかに小高い場所に営まれていました。「環濠」とは集落の周囲をめぐる濠(ほり)のことです。集落の中には四角や円形の竪穴住居が立ち並び、環濠の外側には、整然と並ぶ墓域も形成されていました。また湿地では水田の遺構が見つ

かり、集落から炭化した米も出土しています。

猫島遺跡の大きな特徴は、弥生時代中期の、ある時期における集落の形が、はっきりわかるものだという事。二重環濠によって、集落の内と外との境界が誰の目にも明らかになった時期があったのです。

二重環濠は洪水対策？

ではなぜ、環濠が必要だったのでしょうか。当時は溝をめぐらして防御するほどの危険が存在したのでしょうか。環濠の周囲からたくさんの矢じりが見つかっています。猫島弥生人が濠に捨てたものかも知れませんが、あるいは外から射込まれたものでなかったか。調査では明らかになりませんでした。発掘担当者はそんな想像をめぐらせています。

しかし何といっても猫島集落を襲った最大の脅威は、やはり激しい洪水でした。遺跡の北東部では、環濠を乗り越え集落の一部を埋め尽くす、分厚い砂層が観察されています。幸いにして、集落は壊滅をのがれ、人々はムラの再建に取りかかります。濠を掘り直し、環濠間にあった堤を高くしたことを調査により明らかになっています。二重環濠は水害対策の機能をも担ったものかもしれません。そしてもしかしたら……。発掘担当者の想像は膨らみます。これが、かわなみ地域でよく見られる「輪中」の始まりなのかもしれないと……。

木曾川今昔物語 かわなみ通信 Vol.10

朝鮮使節が通った日本最大の「船橋」

ズラリ 300 艘で臨時の橋

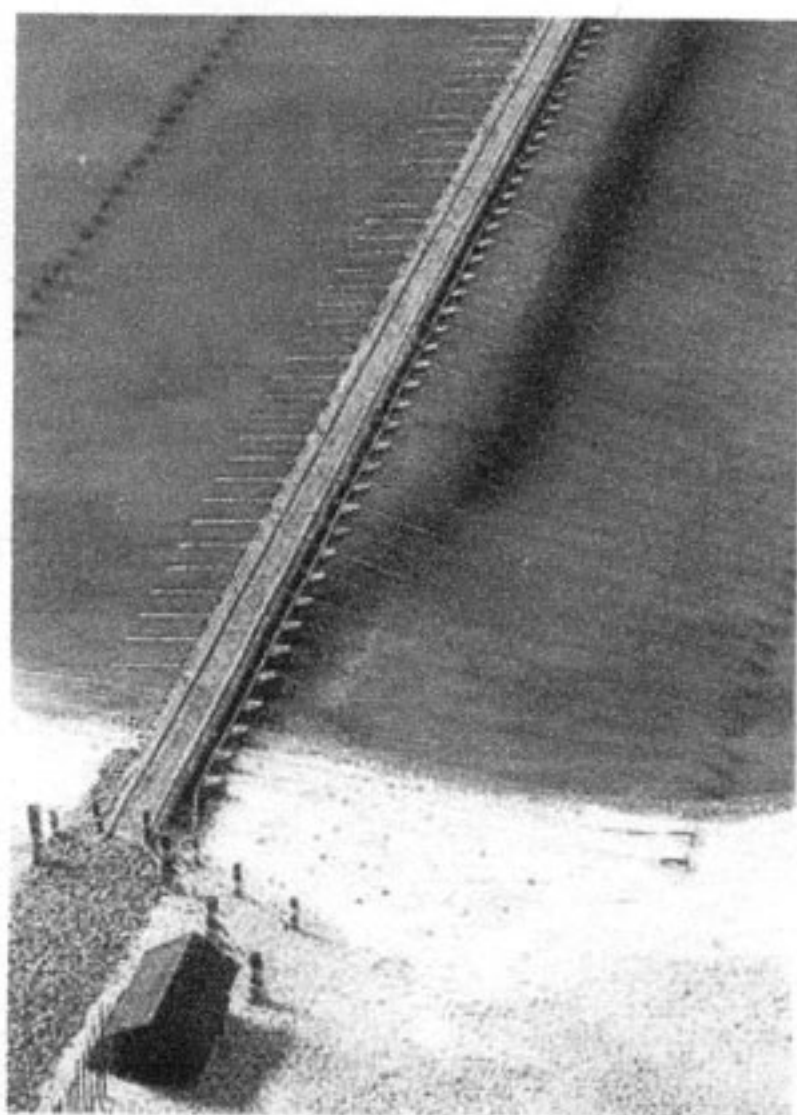
江戸時代、尾張と美濃の国境を流れる木曾川には橋がなく、美濃路を行き来する旅人は、渡し船を利用するのが普通でした。当時、起宿（尾西市）から木曾川を渡り、美濃へ抜ける美濃路は人馬の往来も盛んな街道。現在からすると、その重要な道をつなぐ川に橋ひとつないのは不思議な感じがしますが、幕府が防備上の理由から橋を架けることを禁じていたためだと言われています。

しかし、そんな木曾川にも、特別な通行がある場合に限り、立派な臨時の橋が架かりました。それが「船橋」です。

、文献では、1607（慶長12）年、朝鮮から通信使の一行が往来することとなり、行列を安全に早く通行させる必要から、木曾川に初めての船橋が架かったとされています。現在の尾西市起字堤町と羽島市正木町三ッ柳を結ぶものでした。以来、江戸時代を通じて18回、朝鮮使節や将軍の大行列などが通行する際に架けられました。

船橋とは、簡単に言うと、多数の小船を川を横切るように並べ固定し、その上に厚い板を置いて橋にしたもの。実は、古事記にも船橋の記述があるなど歴史は古く、中世以降各地に架けられた記録が残っています。その中でも起の船橋は日本最大の規模を誇る実に立派なものでした。尾西市歴史民俗資料館の「起

「川船橋略絵図」(1682年)には、全長約864m、通路幅約2.7m、274艘(大船44艘、小船230艘)もの船がズラリと並べられたと記述されています。



尾西市歴史民俗資料館の「船橋」模型

この船橋の通行は一般人には決して許されませんでした。それでも船橋が架かると、一行が堂々と船橋を渡るさまを見物しに遠方から多くの人がつめかけ、起宿はにぎわったということです。

見物人で大にぎわい

架設にあたっては、美濃・尾張の川沿いの村々から300艘を超す船を集め、熱田のあたりから架橋のエキスパートとして水主(かこ)と呼ばれる技術者を、また近郷から延べにして5千人~1万人近い人足を動員。通行者の往復のため4カ月半~8カ月の間架橋したようです。

その船橋を利用した感想を朝鮮通信使の一人がこう記しています。「200余隻の船で浮橋を架け木板を敷き、大きな鉄索でつないで板の端を引いて押さえて、船が動揺しないようにし、その上、麻の太い索でつないであって、はなはだ堅固であった。渡しには小屋を造って役人を配置し、船ごとに軍人を置いて護衛するようにしてあり、そのやり方はく雄壮で記録できないほどである…」。

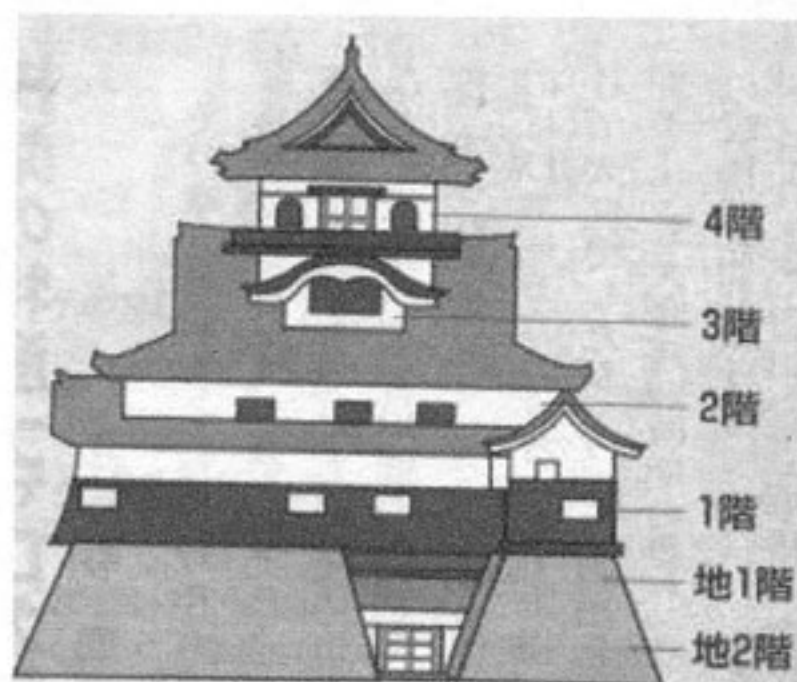
しかし、長くは8カ月にも及ぶ架橋の間通行が行われるのはほんの一時のこと。

木曾川今昔物語 かわなみ通信 Vol.11

城づくりの歴史を語る国宝「犬山城」

完成までに3段階

木曾川を見下ろす小高い丘の上にそびえるように建つ「犬山城」。1537年(天文6年)に織田信長の叔父織田信康によって築城されたとわれ、以来、数多くの城主交代がありました。1618年(元和4年)からは成瀬家の城となり、明治4年の廃藩置県を迎えます。現在、姫路城、彦根城、松本城と並ぶ国宝の城のひとつです。



▲犬山城天守:高さ24m。3階に見えるが、地下2階、地上4階の構造で、石垣部分が地下室になっている。

犬山城の象徴ともいえる天守は、日本の天守建築の歴史をよく表しているところに、大きな価値があるとされています。

その特徴は、大きな下層の館の上に、上層部分にあたる物見櫓〔ものみやぐら〕（見張り台）のようなものをちょこんと載せた形にあります。このような構造の天守は「望楼型」（ぼうろうがた）と呼ばれ、天守建築の歴史からいうと初期の形です。これに対し、名古屋城などのように上層と下層のつながりが一体的な「塔」のような構造のものを層塔型（そうとうがた）と呼びます。天守建築は望楼型から層塔型に変わっていったといわれています。

犬山城が現在の姿に至る成立過程は、昭和36年～40年の大規模な解体修理の調査などで、3段階あったことが明らかにされています。まず、1、2階の下層部分が造られて、しばらく時代を経た後、その上に3、4階の望楼部分を載せる形で増築。その後、また時代を置いて3階に唐破風（からはふ）と呼ばれる弓を伏せたような飾りが施されました。唐破風とは、法隆寺など鎌倉時代から見られる飾りで、玄関の象徴とも言えるものです。

廻縁が巡る理由

犬山城の天守には、もう一つ大きな特徴があります。それは4階にある廻縁（外回廊）です。唐破風と同時期に増築されたと言われるこの廻縁からは、濃尾平野の見事な眺望が楽しめます。構造的には、雨水がたまり材料を腐らせやすなど弱点も多く、もともとあった廻縁の外に板壁を張って室内に取り込んだという城もあります。犬山城がそうされなかったのはどうしてなのかは明らかになっていません。しかしこんな推測は許されるでしょうか。木曾川の恵みを受け濃尾平野一帯にどこまでも広がる稲の青々とした成長のさま、収穫のときには金色に光る稲穂の豊かな実り…代々の城主は国帰りのたびに廻縁からそれを眺め、この眺めに勝るものはなしと考えたと。

現在、晴れた日には、南にJRセントラルタワーズやナゴヤドーム、北東に御嶽山、北西に岐阜城を望むことができます。

現在の一宮

一宮市（いちのみや）

愛知県北西部、濃尾平野にある市、千九百二十一年に市制。

昭和の中頃に、いちのみやを、いちみやに改名した。

中心街は尾張一宮真清田（ますみだ）神社の鳥居前町を中核に市場町（三八市）として発達、東海道本線、名鉄名古屋本線、名神高速道路が通じる。尾西織物工業地帯の中心で、かつては綿布を生産していたが、現在は毛織物を多産、染色、卸商など関連企業も多い。近年は電気機器工業なども伸びている。名古屋市との衛星都市化も顕著。

82.39 km² 二六万七三五九人（1995）

マイペディアより

真清田神社

愛知県一宮市に鎮座、旧国幣中社、尾張氏の祖神 火明命（ほあかりのみこと）をまつるといふ。延喜式内の名神大社とされ、尾張国の一の宮、例祭は四月三日。ほかに織物感謝祭（七月第三日曜前後三日間）、太大神楽と駒牽（こまひき）神事（十月十五日）など。鎌倉期の木造舞楽面は重要文化財。

一宮 いちのみや

古代末期から中世初頭にかけて発生した一種の社格。諸国において由緒が深く、最も崇敬を集め経済的基盤も大きかった神社を称したようである。

マイベディアより

<http://nazca-e.hp.infoseek.co.jp/kodai/ow-kozu.html>

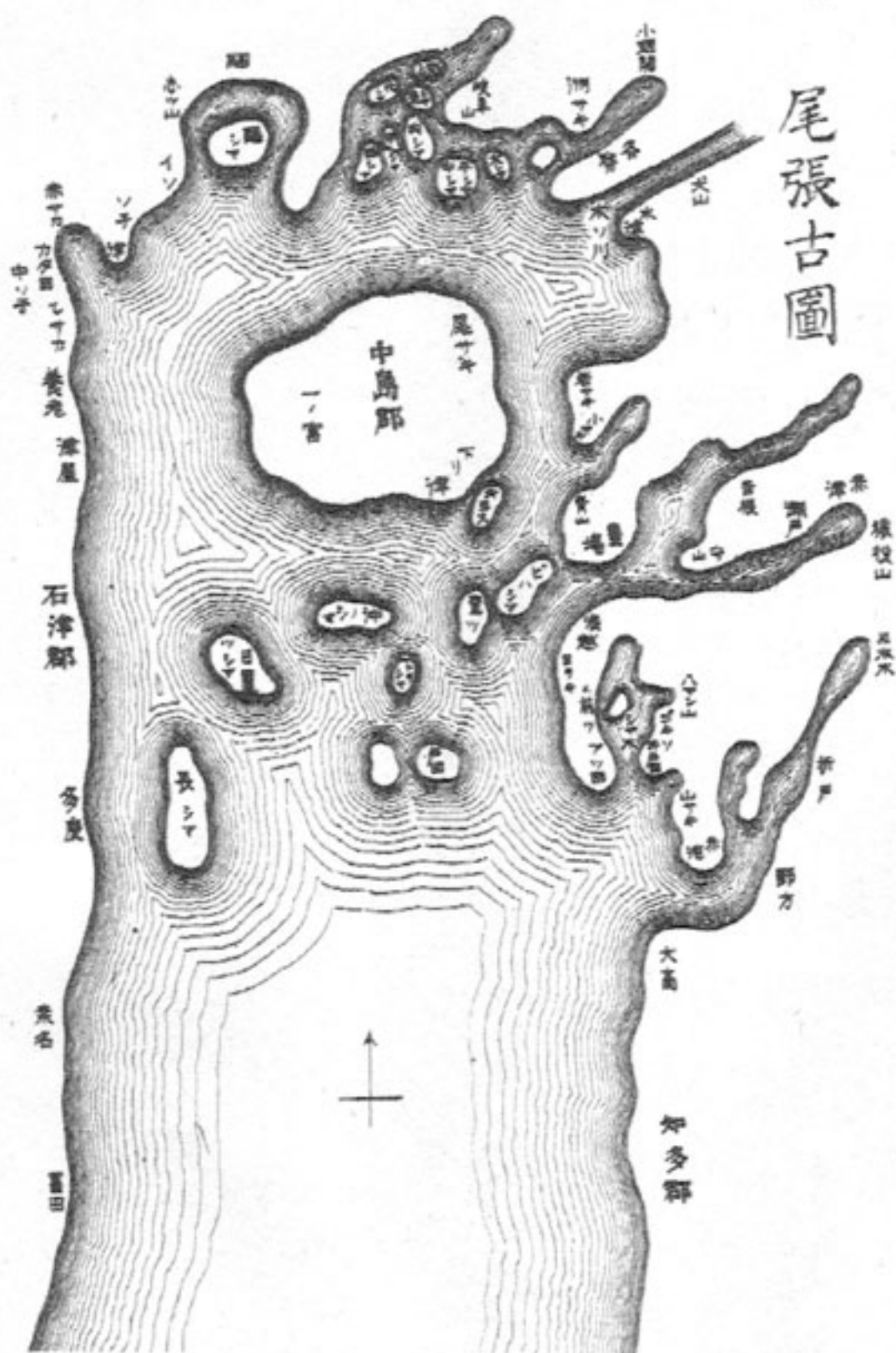
尾張国古絵図

「尾張名所図絵」の巻頭にあるこの絵図を初めて見た時、一瞬息を止めて眺めたことを今でも忘れない。2年前である。

この「尾張名所図絵」は明治の文明開化による風景を基に明治23年、宮戸宗太郎氏によりGUIDE BOOK OF OWARIとして出版された小冊子である。
(稲沢市図書館所蔵)

三河国の猿投神社に古地図が伝わる。江戸時代に複写されたと伝えられるものが多くの書に引用されている。その注釈を記す。

古絵図ノ原本ハ何年間調整シタルモノカ且其ノ所在ヲモ判明スルコト能ハズ惟古老ノ口碑ニ存スル所ハ養老年間ノ地形ニシテ該社ノ宮殿ヨリ出シト



云フ

* *

尾張平野はかつて養老山脈を断崖とする深い深い谷でした。1万年程前から海面上昇し、海がひたひたと山に迫りました。6000年程前、ピークに達します。縄文海進と呼びます。2回程海が後退したといわれます。今から2000年前、4m程低下しました。その時期は大和朝廷成立の古墳時代に呼応します。その500年程の間に、神は人に恵を与えました。沼や川跡を巧みに利用し堤防を築く技術を持った氏族は葦原を耕地に変えることができました。それは、正に「国産み」だったのでしょう。海面は再び上昇し、現在の高さに落ち着きました。堤防は海を阻止しましたが、基本的には尾張の姿はこの縄文海進の姿なのでしょう。

時として、神は私達にその事を告げる。

昭和34年の伊勢湾台風時の水没線は縄文海進と重なると言われます。縄文遺跡の分布はこの水没水際線上に点在するという。

張り巡らされた伊勢湾防潮堤は、第二の「国産み」であった。

私達は生活と命の尊さと引き換えに、強固な岸壁を作り白砂青松の海岸線を失った。それは私達自身の選択であった事は忘れないで下さい。

* *

今から1250年程前、再び上昇した海面と伊勢湾台風のような状況で明らかにこのよう海原が出現したことは想像に難くない。伊吹山、本宮山猿投山。これらの頂上から大王の視点で地図は画ける。猿投神社古地図は私の尾張平野の古代の物語の道標の地図である。

2000.8.17

国土交通省中部地方整備局

木曾川上流河川事務所

岐阜市忠節町5-1
TEL 058-251-1321
FAX 058-251-4301

◎ 岐阜県の河川名の由来

<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisojyo/genesis/index.html>

長良川 ながらがわ

県下最大の河で、岐阜市付近より下流は、往古よりたびたびの洪水によって流路が変わり、また現在のようになったのは濃尾地震以後の河川改修によるもの。みなもとは高鷲村（旧鷲見郷）見当山西麓より発し旧上ノ保川旧郡上川、

旧伊奈波川と名をつらね伊勢の海に注ぐ。長良川と呼ぶようになるのは、一六一一年長良村崇福寺前へ流入、一六三六年崇福寺前新川となる。等洪水によって長良村を流れるようになって以後と考えたい、それまでの流路は古川、古々川、井川等と呼ばれていた。

揖斐川 いびがわ

揖斐谷、根尾谷筋より流れ出る。旧揖斐庄を貫流、池田町付近より杭瀬川が本流であったが、りより東南に切れ新川となり現在に至っている。

大江川 おおえがわ

海津町を貫流し古くは、伊勢の海が大きく切れ込んでいてその名残りをとどめている。大は美称「大きな川」の意か。

中江川 なかえがわ

大江川は、上流部で三本に分かれその中央に当る。江川の「江」「川」はいずれも同義の語であるが「江」と「川」を使い分けていた。

東大江川 ひがしおおえがわ

大江川の上流へ東から流れ込む。東（方位）大（美称）江（大川の意）の義か。『新撰志』に「川中にありて、水勢はげしき故にや、洪水に堤の切るゝこと度々也」とある。

西大江川 にしおおえがわ

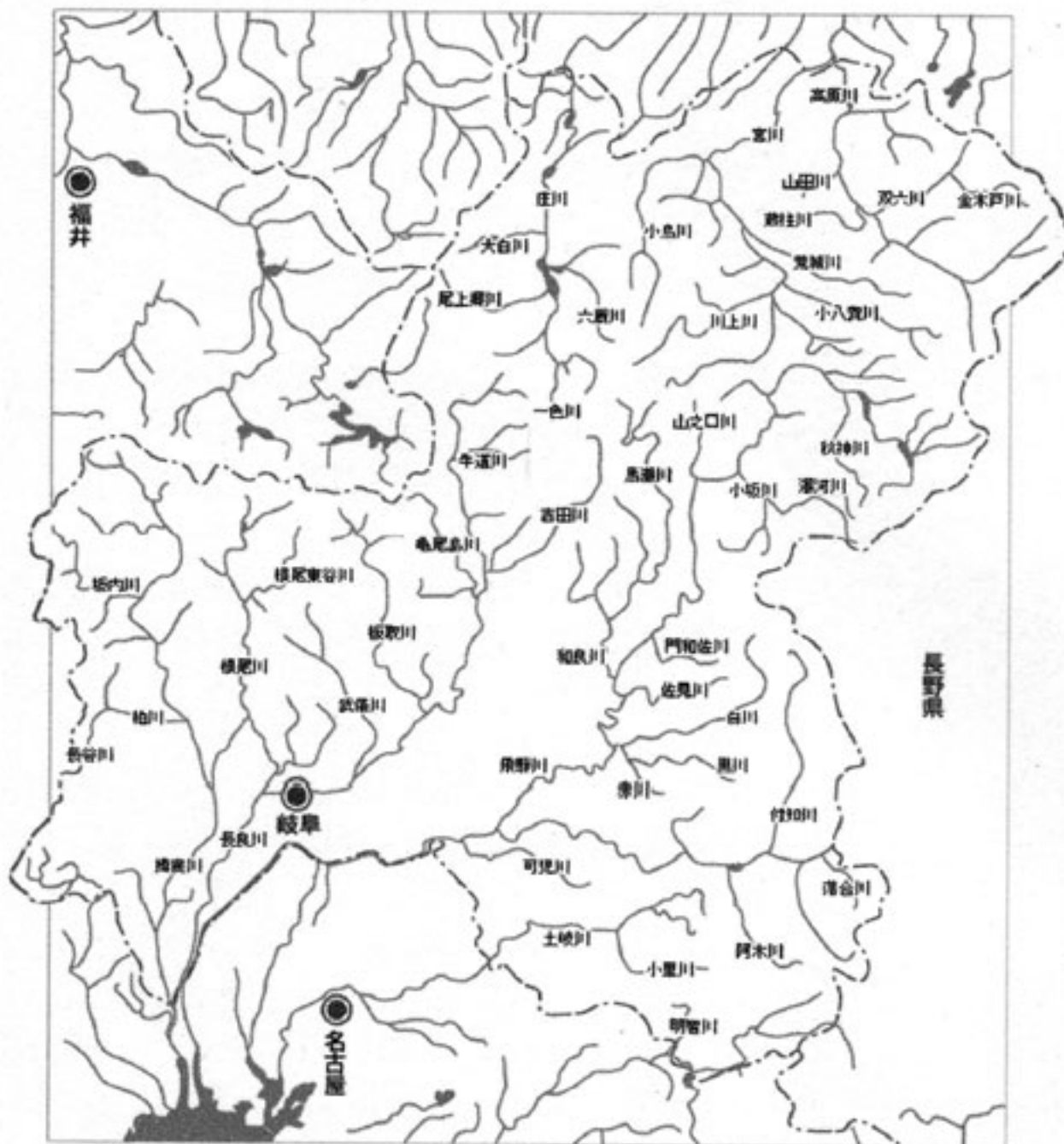
大江川の上流へ西から流れ込む、以上の三川はあたかも熊手のような形状で流れ込んでいる。西（方位）大（美称）江（大川）の意か。

津屋川 つやがわ

養老山脈東麓に沿って津屋地内を流れ五三川と合流、小坪地内で揖斐本流へ注ぐ。昔源義朝都のいくさに破れ、青墓よりこの津屋川を舟で知多野間大坊へ落ちたと伝わる。津屋、それは津（川港・入江）に並ぶ苫（とま）小屋を表現したと考える。また津屋地内を通るためかもしれない。

大樽川 おおくれがわ

輪ノ内町大藪付近より長良川が分派西南に向って揖斐本流へ流れていたが、今は大藪で締切られ細い川となっている。かつては巾広く流れ江戸時代を頂点として舟運が発達し、北陸、伊勢、美濃、尾張方面からの物資はこの水路を使って舟便輸送をした。



金草川 かなぐ さがわ

養老町を牧田
(蒔田とも書く)
川にほぼ沿って
流れ、栗笠地内
で牧田川に注ぐ。
金草はカナクソ、
鉾物性を帯びた
水質の川の義か。

牧田川 まきた がわ

上石津時山よ
り発し、上石津
町を北へ流れ今
尾橋上流大巻地
内で揖斐本流へ。
昔関ヶ原合戦の
折、西軍の大敗
によって島津義
久の敵前突破は
有名。鳥頭坂よ
りこの川筋を時

山へ信楽、多羅尾を経て大阪より退却。また一説には、養老山脈にそって駒野あたりより山越えで落ちのびたとも伝わる。

小畑川 おぼたがわ

現在の名神高速道路北側に沿って、安久地内より小畑地内を流れ烏江橋上流、江月地内で本流に注ぐ。

杭瀬川 くぜがわ

池田町宮地地内より池田山の東斜面の谷々の水を集め南流、途中大谷川と合し大垣市高淵地内で牧田川へ合流。かつては揖斐本流であり、赤坂町の東を巾広く流れていたが室町末期享禄三年（一五三〇）の大洪水で、杉野地内で現流となる。壬申の乱折大海人（おおあまと）軍は、黒地川の戦で疲れきった身を、この川で清めつかれを癒した。すなわち苦癒（くいや）せ川と、そして杭瀬川と転化。また南北朝の頃、北朝足利、土岐軍と、南北北畠軍との激戦もこの川で戦われ、南朝軍の戦勝に終わったが、なぜか南朝軍の南転はわから

ない。

相川 あいかわ

関ヶ原町を東流、大垣市綾里地内で杭瀬川に合流。昔は美濃路北部に沿って流れ享禄年間位までは大きな川であったようである。アイは形状川名。

大谷川 おおたにがわ

青墓地内より綾里地内で相川へ合流。大谷は字義のように大谷を流れる川。溪谷の川である。

岩手川 いわてがわ

磐手とも書く。豊臣秀吉の智将竹中半兵衛重治の居城、岩手菩提山城跡のそばを流れ、垂井町で相川へ合流。各地にある地名、岩出の義、岩石の所在にちなむ川名か。

梨木川 なしのきがわ

伊吹山ドライブウェイ付近緑ヶ丘を流れ藤古川に合流。植物名にちなむ川名。

藤古川 ふじこがわ

滋賀県伊吹山の麓上平寺地内より東南に流れ、関ヶ原町を経て名神高速道路を潜（くぐ）り萩原地内で牧田川へ合流。藤古は藤川（ふじこ）の義か。

黒血川 くろちがわ

壬申の乱の折、大友軍、大海人軍とこの川を決戦場に、そして両軍の死屍はるるいと、血で川は真黒に染まる程であったと後世まで伝わり以来、黒血川といわれる様になった。

今須川 いますがわ

今須、旧称居益鎌倉権五郎景政の子孫長江氏、ここに居城をかまえ地頭職となり室町時代は美濃半国の守護代、また齊藤妙椿と争い滅亡する。ス川のスは洲（砂）の意をもつ。

中狭川 なかさがわ

明谷を流れ落ち今須川へ合流サガワのサは接頭語。ただし迫（せ）の意味を持つ。全国的に分布する。狭川は川迫を示す地形語。

祖谷谷川 そやだにがわ

祖谷谷より流れ今須川へ合流。祖は親を意味する語。親谷-大谷を意味する語である。徳島県ではオヤダニ→イヤダニ（祖谷溪）に転じてい

鍛冶屋川 かじやがわ

上石津町鍛冶屋谷より流れ出て、下多良にて牧田川に合流。上流には津々羅谷あるいは多良等鑄物師（いもじ）、金吹師（かなふき）に関係があるか。

水門川 すいもんがわ

水門、その名の通り旧大垣城の外濠として、また舟運の盛んな頃は、城下まで舟が通い現在も川港の灯台が残りその面影をとどめている。県文指定。

中須川 なかすがわ

墨俣町下宿安八町森部の間にて長良川より分派していたが、今は改修され中須にて揖斐本流へと注いでいる。

中之江川 なかのえがわ

大垣市和合より流れ水門川に注ぐ。中（方位）之（助詞）江（川）の意であろう。

東中之江川 ひがしなかのえがわ

大垣市和合より浅草地内で水門川へ合流、中之江川の東部を示す方位川名である。

五六川 ごろくがわ

糸貫町より初まり墨俣町一夜城跡付近で犀川と合流。新犀川を経て森部排水機場本流へ流れる。ゴーロ、ゴーラは岩石の累々たる形状を指す。

中川 なかがわ

五六川の東側に沿って流れる。全国的に分布する川名、中津川（津は助詞）と同義の川名。

桑原川 くわばらがわ

新幹線羽島駅付近より初り南流して長良川本流へ。桑原その名の通り桑畑が多く植えられていた。天正一四年大洪水の折に、出来た木曾川の河跡。

境川 さかいがわ

境川、美濃尾張の境界であった。木曾川（古称広野川三代実録清和天皇貞観七年一二月二七日条）は大きく各務原前渡山の前より岐阜市寄りに、この境界を流れ、いくつかの分派を以て墨俣へと流れていたのである。現在の流れにほぼなったのは、天正一四年六月二四日（一五八六）の大洪水によって流

れが変り出来た。現在の県境としての木曾川は、大閘検地以後の事である。

大江川 おおえがわ

境川の項でのべた如く長良川、木曾川等は多くの分流をもち、この大江川もかつては大きく切込みこの名を残している。現在は河川改修によって境川の支流のようになっている。

荒田川 あらたがわ

荒田-新田この流域には、野一色、北一色、前一色等の名がみられ新田開発に大きく関係があったようである。江戸時代加納城の東の外堀でもあった。

犀川 さいかわ

先の五六川、中川、糸貫川を加えて昭和初期に、騒擾事件があった、これは輪中対輪中の抗争であるがそのきっかけは、五六川、中川、犀川まとめ墨俣よりまっすぐに南下させる案であった。上流の輪中と下流部の輪中とが排水による利害と、輪中分断という過去幾度か洪水の危険にさらされながら、いくつもの輪中が重り隣り合わせになって生きてきた。農家の人達にとっては、当然反対すべき条件となってこの工事案に反対をとらえたのである。この事件後幾度か工事案は変えられ現在の森部地区に、排水施設を設けることで一応の決着がつけられた。輪中とは、一郷もしくは数郷の部落を土塁で囲み、丁度ゴム輪を平面に並べたようにそれぞれ、永年にわたって築いてきたのである。揖斐川、長良川、木曾川にはさまれた点在する島のような土地を、この輪中をも

平野井川	ひらのいがわ	神戸町下宮地区より呂久を経て揖斐本流へ注ぐ。
東川	あづまがわ	池田町の東部を流れる杭瀬川に注ぐ。字義を示すように東方の川である。
中川	なかがわ	杭瀬川と東川との間を流れる杭瀬川に注ぐ。前記、中川と同義の川名。
桂川	かつらがわ	揖斐山谷より流れ、揖斐川筋と並行して岡島橋下流で揖斐川本流へ注ぐ。カツラは植物名。あるいはカタウラ(片浦)の転化語か・曲流地域の形状語。
柏川	かすかわ	春日谷(槽河郷)を西から東へ貫流。また、柏川の語源は、昔ここに槽川新五大夫と云う長者が住んでいたらしく、酒を作りその粕を川へ流したのでこの名がついたと、また一説には、大和国奈良槽河の木地師であった槽河麻五と云う人が、この地に移住してきてその名前がついたとも伝わる。参考文献は奥美濃・山葵会刊。この春日谷は槽川谷二四流として、木地師の活躍した処である。
高橋谷川	たかはしだにがわ	高橋谷より流れ谷山を経て柏川へ注ぐ。この名から類推して木地師との関係で高橋姓の人の活躍した処とも考えられる。
表川	おもてがわ	春日谷の北、深奥部市瀬(いちのせ)を流れる柏川へと注ぐ。字義の通り表は裏の対語か。日照のよい地域を表す所が多い。
長谷川	はせがわ	春日谷南深奥部古屋、笹又部落を流れ、それは清く決して濁ったことがないといわれる。長い谷の義。大和の長谷寺と同義の川名。形状川名。
小津川	おずがわ	東津汲より上流小津地区までを小津川と解したい。小津、先に柏川の項でふれておいたが木地師(小津ロクロ師)の活躍した処でもあって、この地には、高橋(小川)但馬守なる人物を先祖とする数々の話が伝えられている。この上流部は高知川と呼ばれている。参考文献は美濃民俗・長屋高橋氏と木地師。
日坂川	ひさかがわ	津汲久世橋から西の谷合へ入る。ここも木地師伝承が多い。日坂、日のよくあたる坂の多い部落。

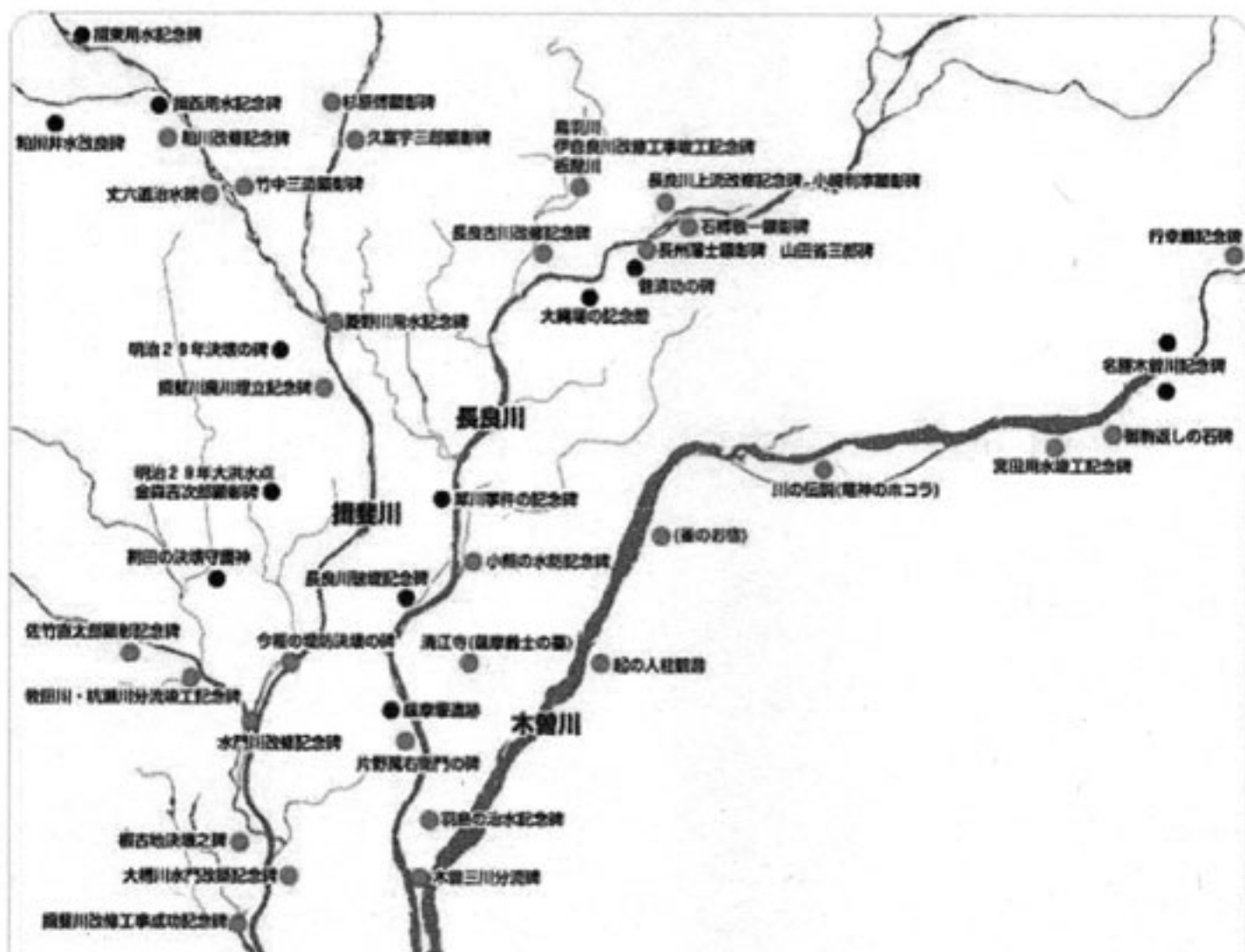
ってつな
がれ、そ
して明治
以降の本
流改修工
事により
護岸堤防
ががん丈
なものに
なり、輪
中の意義、
存在意識
は薄れて
いったの
である。
参考文献
岐阜県

<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisojyo/history/index.html>

国土交通省中部地方整備局

木曾川上流河川事務所

岐阜市忠節町5-1
TEL 058-251-1321
FAX 058-251-4301



幾度かの洪水を繰り返して、木曾川が現在の流れに落ち着いたのは、約 400 年前の天正 14 年 (1586) の洪水の時でした。その 22 年後には『御囲堤』が築かれましたが、対岸の美農側は、本格的な堤防の築造が許されなかったため、いぜんとして洪水の被害にあげていました。

この地に集まる人々が増え、治水の必要性が高まって、はじめて本格的に取り組まれた工事が宝暦 4 年 (1754) の『宝暦治水』でした。それから 150 年後、海外の進んだ技術を取り入れた大規模な治水事業『明治改修』が完成したのは明治 45 年 (1912) のことです。

木曾三川の水を得て発展した濃尾の人々は、その後も絶え間なく治水・利水の努力を重ねています。

三川の周辺に散らばる河川改修に関する碑は、こうした先人の偉大な努力と、自然への限り無い憧憬を永く後世へ伝えていくことでしょう。

みなさまも一度ごらんになってはいかがですか？

<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/gakusyu/shizen.html>

濃尾平野の成り立ち（大昔）



今から約 2 万年前、木曾三川中下流域は陸地ではなく海でした。

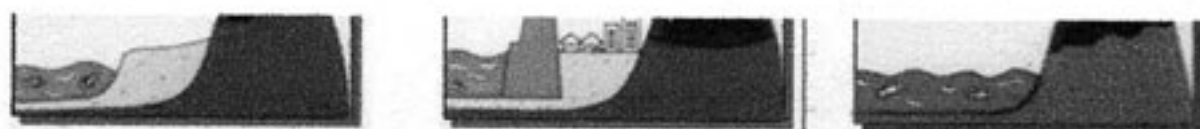
三川の上流の方から流されてくる土砂が、海に流れ込んでいました。

その後、約 5 千年前頃からたくさんの土砂が積り始め、約 3 千年前に今のような地形ができたといわれています。

石器時代に入ってから、この地にも人がやってきて暮らしはじめました。

人がたくさん住むようになって、川は自然の流れのまま、たえず場所を変えて洪水が起こっていました。

木曾川、長良川、揖斐川の三本の川は網目のようにつながっているため、濃尾平野では雨が降るたびに水があふれ出し、人々は昔から多くの洪水に苦しめられてきたのです。



■感潮区域

木曾三川下流の河口付近で、水位や流速に海の潮汐が影響を与える区間を「感潮区域」といいます。また、河口付近の海水と河川水が混合した区域を「汽水域（きすいいき）」といいます。この感潮・汽水区域では川幅が広く、淡水性・塩水性の両方の動植物の生息しやすい多様な環境が作られ、それに応じて独特の生態系が



維持されています。汽水域一帯はヤマトシジミのわが国有数の生息地ともなっており、休日には多くの方が潮干狩りを楽しんでいます。

■ワンド

洪水時に新たにできた水たまりのようなよどみ、みお筋が湾曲して残された場所。水制などによる砂州の形成によって河川の通常の流れと分離したところなどで流速がきわめて小さい池のような静水域が形成され、魚や鳥、植物にとって大切な生息の場所となっています。河川に生物の多様性をもたらすとして、その役割が見直されています。木曾川下流にあるケレップ水製の周辺で見られます。



■シギ・チドリ

シギ・チドリはシギ科とチドリ科鳥類の総称。多くの種は、春と秋の渡りの時期に、繁殖地と越冬地の間を移動する途中で日本の干潟や河口などの湿地に飛来します。多国間にまたがり季節移動するシギ・チドリ類を保護するためには、繁殖地、渡りの経由地、越冬地の環境保全が大切とされています。世界的に注目されている鳥類で、すでに「東アジア・太平洋地域シギ・チドリ類重要生息地ネットワーク」が発足。9カ国29湿地が参加して国際的な保護がはかられています。木曾三川河口部の干潟はシギ・チドリの渡りの中継地となっています。

木曾三川の歴史

■水屋



河川が氾濫したときの避難場所として、母屋に隣接して建てられたのが水屋です。洪水から自分たちの命を守るため、屋敷内に高く土盛石積した上に避難用の建物を建てました。水屋には、米やみそなどの食糧や生活に必要なものが保管され、水が引くまでの間の生活の場となりました。また水屋を持たない人々は、助命壇（じょめいだん）といわれる土盛りをした高台を共同で築いて避難場所にしていました。

■御囲堤（おかこいづつみ）

かつて木曾三川は下流部で網の目のように入り組んで流れていたため洪水が絶えませんでした。慶長13年（1608）から、慶長14年（1609）にかけて、徳川家康により現在の愛知県犬山市から弥富市までの12里（48km）にわたる木曾川左岸に、尾張国を囲む大堤防が築



かれました。これは「御囲堤」とよばれ、洪水対策に併せ西国大名の進入を防ぐ目的もあったといわれています。木曾川左岸に尾張側を守る御囲堤が出来たことによって、木曾川右岸が氾濫しやすくなり、美濃国側は頻繁に洪水の被害を受けることになりました。

■宝暦治水



宝暦3年(1753)、江戸幕府は薩摩藩に木曾三川の治水工事を命じました。工事は薩摩藩の家老・平田鞆負(ひらたゆきえ)が総奉行となり、幕府の厳しい監督のもとに進められました。その過程で多くの犠牲者を出すとともに、膨大な費用がかかり藩財政も圧迫しました。工事が終わったあと平田鞆負(ひらたゆきえ)はすべての責任をとり「住みなれし 里も今更 名残りにて

立ちぞわづらふ 美濃の大牧」という辞世の歌を残して自刃したといわれています。宝暦治水をしのぶ史蹟としては、工事後薩摩藩士が苗を植えたといわれる「千本松原」と「宝暦治水碑」「治水神社」などがあります。

■ヨハネス・デ・レーケ

ヨハネス・デ・レーケは、わが国の治水事業に大きな功績を残したオランダ人技師です。明治10年から木曾三川改修計画を担当。現地調査に基づいて起草したのが「木曾川下流概説書」です。この書によれば水害多発の原因を「流出する土砂の堆積にある」と指摘しています。そしてそれは「流域における樹木の伐採によって引き起こされている」と述べています。日本の近代的な治水工事の先駆けとなった木曾三川分流工事は、デ・レーケが作成した木曾三川改修計画に基づいて、乱流していた川を木曾川・長良川・揖斐川の三つの川に分離するため、明治20年(1887)着工、明治45年(1912)に完成しています。各々の川の流れを中央部に導き、堤防近くの流れの勢いを抑えるケレップ水制など多くの技術がデ・レーケにより伝えられました。デ・レーケは、明治6年にオランダから来日し、30年間にわたって日本の河川・港湾事業を指導しました。

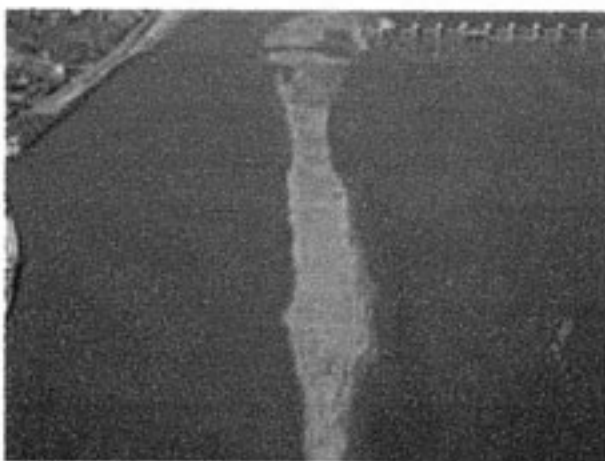


木曾三川の環境

■ヨシ原

ヨシ原は川の歴史、文化にとって貴重であるばかりか、希少植物の生育場所にもなる川とは切っても切れない存在です。しかし防災を目的とした護岸工事な

どにより、その多くが失われてしまいました。失われた川のもとの姿を復元するために、地域住民が主体となり行政と連携しながら木曾川下流右岸でヨシ原の再生事業が進められています。ヨシ原再生地では、地域住民による苗植えやポット苗植えによるヨシ原づくりなどにより、ヨシが生育できる基盤整備を行いました。その後も住民によるヨシの観察や保全活動が続けられています。桑名市上之輪新田地先でヨシ原再生地を見ることが出来ます。



■干潟 (ひがた)

木曾川・揖斐川の河口域にはかつて広大な干潟が存在し、魚介類が多く生息していました。またエサを求めたり羽を休めたりする多くの鳥の姿がありました。でも干拓や過剰な地下水汲み上げによる地盤沈下などにより、干潟のほとんどは消滅してしまいました。木曾川下流河川事務所は、水生生物などの生息環境の場を復活させるため、木曾川・揖斐川の河口域の城南沖と長島沖の2カ所に人工干潟を造成しました。その後の調査で、多様な生物の生息の場として重要な役割を果たしていることが確認されました。



木曾三川の防災

■伊勢湾台風

昭和34年9月26日、和歌山県潮岬に上陸した台風15号は低気圧と激しい風による海面上昇が驚異的な高潮を発生させ伊勢湾一帯を襲いました。その被害のほとんどは東海地方に集中したので、「伊勢湾台風」と名づけられました。愛知、岐阜、三重3県の死者、行方不明4645人、被災者120万人に達する大惨事をもたらしました。特に大きな被害を受けたのは人家の密集している名古屋市南部と西部の愛知県海部郡一帯、三重県北部の木曾三川河口部付近で、異常潮位のため、いたるところで堤防がきれ民家は一瞬にして泥水の下となりました。海水の浸水は、長い地域で2カ月以上も続きました。



■洪水予報

中部地方整備局と地方気象台は洪水の恐れがある場合、共同で洪水予報文を作成しています。例えば木曾川下流河川事務所の場合、名古屋地方気象台と共同で発表を行います。平成19年4月からは、その発表に際し、より分かりやすい表現を用いることになりました。住民が迷うことなく避難行動をとれるように

です。例えば従来「洪水警報」と発表されていたものを「はん濫危険情報」や「はん濫警戒情報」などに分けられ、それぞれに「水位はさらに上昇する恐れ」などの具体的な見出しが付けられることになりました。これで情報を受けた住民は、自分がどのように行動したらいいか、従来より判断しやすくなりました。

木曾三川で遊ぶ

■水辺の楽校（みずべのがっこう）

子どもたちの河川利用の促進、体験活動の充実を図ることを目的として、行政が地域の人々と協力しながら、水辺を自然体験の場、遊びの場として活用する取り組み。自然の状態をできるだけ保全し、あるいは瀬や淵、せせらぎなどの自然環境を創出するとともに、アクセス改善のため傾斜の緩い河岸の整備などを通じて、子ども達が自然と出会える安全な水辺をつくっています。

木曾三川の下流では、桑名市の「水郷の森」が水辺の楽校の舞台となっています。



治水の歩み

治水の歩みでは、木曾三川の治水の歴史を紹介しています。

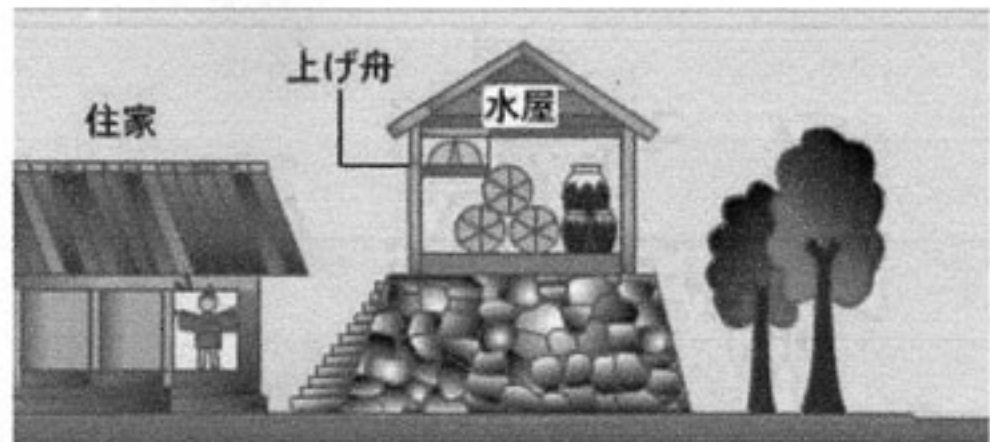
平安時代 約千年前

■水屋の構造

洪水から自分たちの命を守るため考えられたのが「水屋（みずや）」です。

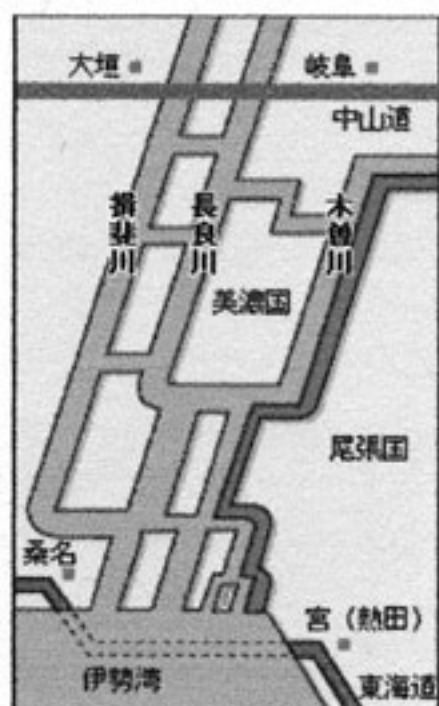
屋敷内に高い石垣を築いて建てられた「水屋」には、米やみそなどの食糧や生活に必要なものが保管されていました。

また「水屋」を持たない人々は、「助命壇（じよめいだん）」といわれる土盛りをした高台を共同で築いて避難場所にしていました。

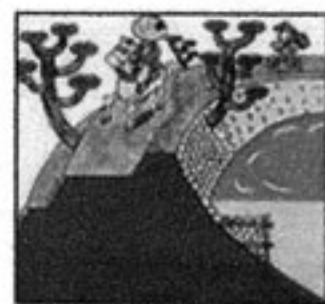
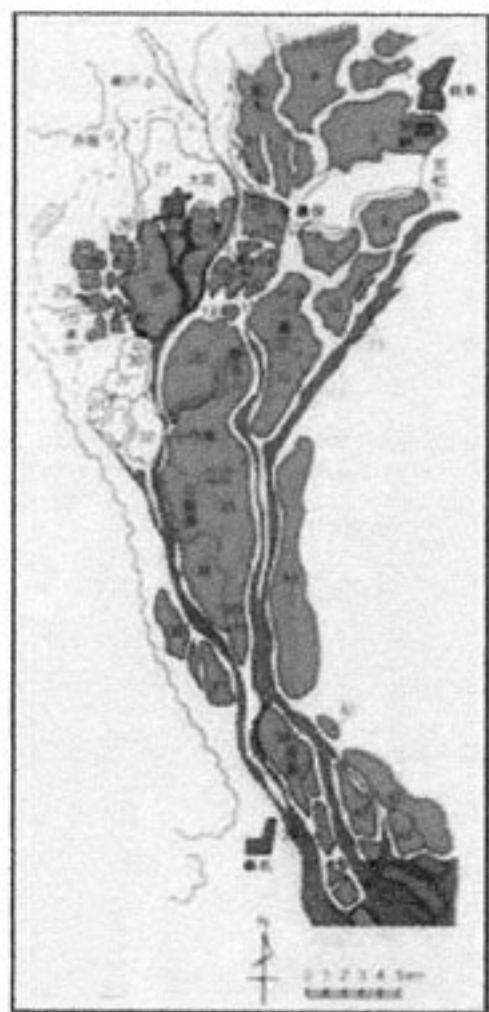


江戸時代前期 約四百年前

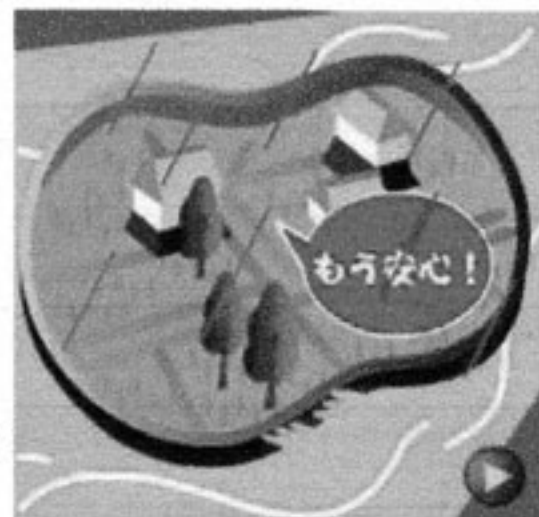
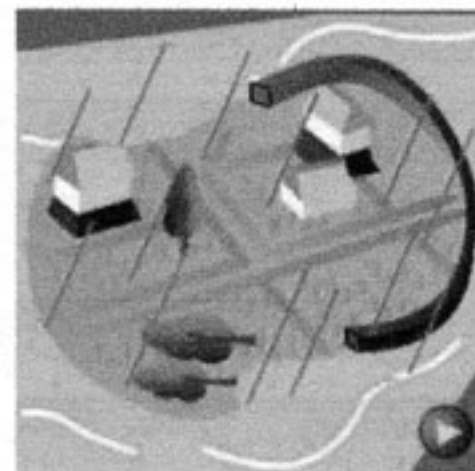
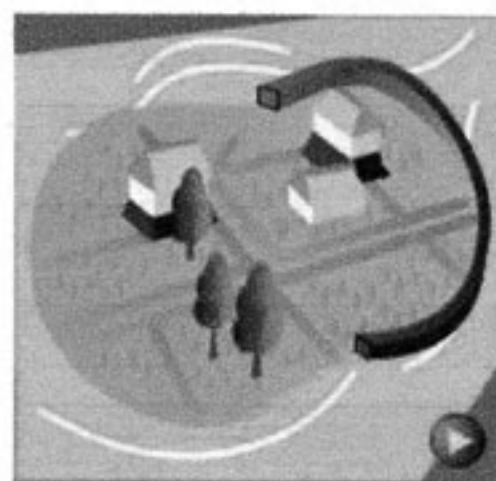
御囲堤の位置



西濃尾平野輪中分布図



御囲堤



西濃尾平野輪中分布図集落をぐるりと堤防で囲んだところが「輪中(わじゅう)」です。

はじめは水はけをよくするため輪の形ではなく、上流側だけに堤防をつくっていました。

洪水の直撃は避けられましたが、水害そのものを防ぐことはできませんでした。

その後、集落をひとつの輪で囲んだ堤防「輪中堤(わじゅうてい)」がつけられるようになり、水害から家や田畑を守ったのです。

1608年に、木曾川左岸にある尾張の国(愛知県)を洪水から守るためにつくられたのが「御囲堤(おかこいつつみ)」です。

その長さは犬山から弥富までの約48キロで、徳川家康が豊臣家に備えるという軍事目的にも使われていました。

しかし、木曾川右岸の美濃の国(岐阜県)は、大きな堤防を築くことを禁止されていたため、度重なる水害に悩まされていました。

宝暦治水 江戸時代中期

宝暦3年(1753)12月25日、江戸幕府は薩摩藩にきわめて多くの費用と人力

がかかる木曾三川の治水工事を命じました。
 工事は宝暦4年2月27日に着工し、宝暦5年5月22日に完成しました。
 工事は薩摩藩の家老・平田鞆負（ひらたゆきえ）が総奉行となり、幕府の厳しい監督のもとに進められました。

しかし、最終的には多くの切腹者と病死者を出す難工事となり、平田鞆負自身も工事完了後、すべての責任をとって自刃をしました。

宝暦治水の目的は、木曾三川の分流でしたが、当時の技術力では完全な分流ができませんでした。

しかし、この宝暦治水が連続した堤防を築く近代治水工事のはじまりとなったのです。

平田鞆負



明治改修 1 明治時代中期

明治改修は、第一期工事から第四期工事完了まで、25年を費やして完成しました。

この工事で作られた施設は、現在でも重要な働きをしています。

明治政府は河川や港湾の工事を行うため、オランダから10人の技師団を招きました。

当時オランダは世界でもっとも優れた水工事技術を持っていました。

その一人ヨハネス・デレーケは明治11年から木曾三川流域を山から海までじっくりと調べて回り、その結果をもとに改修計画を作成しました。明治20年から25年間をかけて三川分流工事が行われ、木曾三川はほぼ現在の姿になりました。この工事は近代的な河川改修工事の幕開けとされています。

デレーケが日本滞在中の30年間に残した功績は大きく、日本の河川・港湾事業の近代化に一生を捧げたと言えるでしょう。



明治改修 2 明治時代中期

■明治改修で作られた設備
 ケレップ水制

川の流れを中央部に導き、堤防近くの流れの勢いを抑える、石と木材でつくられたものです。ケレップとは、オランダ語のクリップ（水はね）がなまったと考えられています。

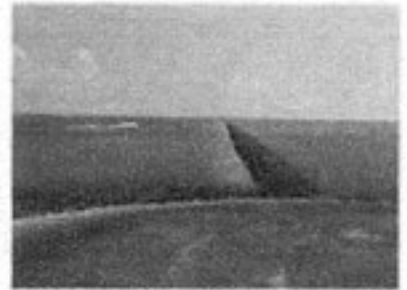
木曾・長良背割堤

川幅約 700m の木曾川と約 500m の長良川の 2 つの大河川を分流するため、明治時代に設けられた延長約 12km の堤防です。



河口導流堤（どうりゅうてい）

河口部が土砂で埋まるのを防ぐために、海につき出した堤防です。木曾川と揖斐川にあります。木曾川導流堤は全長 4680m、揖斐川導流堤は全長 5480m です。



船頭平閘門（せんどうひらこうもん）

水の高さが違う木曾川と長良川の間を船が行き来できるようにした施設です。



近年 1 伊勢湾台風地盤沈下

■伊勢湾台風

伊勢湾台風被害状況 昭和34年9月26日、和歌山県潮岬に上陸した台風15号は、低気圧と激しい風による海面上昇が驚異的な高潮を発生させ伊勢湾一帯を襲いました。



愛知・岐阜・三重の東海三県において死者・行方不明者4,645人、被災者数120万人に達する未曾有の大惨事をもたらしました。

特に大きな被害を受けたのは人家の密集している名古屋市南部および西部・愛知県海部郡一帯・三重県北部の木曾三川河口部付近で、異常潮位のため、いたるところで堤防がきれ堤内地は一瞬にして泥水の下となりました。

海水の浸水は310平方キロメートルの地域にも及びそのうち230平方キロメートルは浸水期間が2ヶ月以上も続きました。

台風の大きさ、災害の多さから、気象庁は「伊勢湾台風」と呼ぶことに決めました。

海拔 0 メートルを示す表示盤

台風の規模としては、昭和9年9月の「室

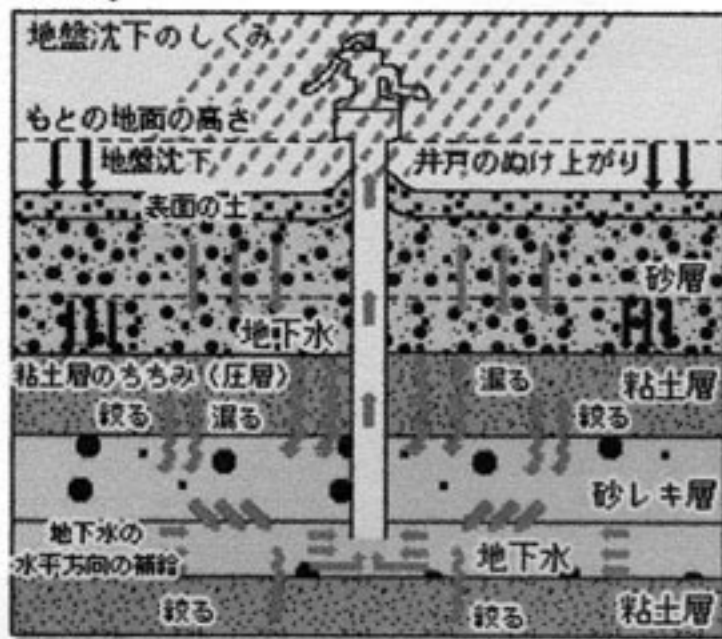


戸台風」、昭和20年9月の「枕崎台風」に次ぎ3番目に数えられています。被害は他に例をみない非常に激しい台風として昭和の歴史に残っています。昭和の時代に入り相次いで大型台風が上陸しましたが、昭和28年9月に上陸した台風13号においては、三重県や三河湾で破堤を伴う大きな被害を受けました。

この被害を契機に「海岸災害防止事業」がおこなわれ、昭和33年12月には「海岸保全施設築造基準」が策定されました。

昭和28年9月から6年後に発生した伊勢湾台風による未曾有の高潮災害は海岸堤防の築造工法の確定を促すとともに高潮対策工法に大きな方向転換をもたらすことになりました。

■地盤沈下 濃尾平野の地盤沈下は、昭和30～40年代に著しく進行しました。



海抜0m以下の地域は274平方キロメートルにも及んでいます。近年でも地盤沈下は停止したわけではなく、わずかな沈下量が記録されています。地盤の沈下により、高潮堤防をはじめとする治水施設の機能が低下したり、低い平地の小河川の水の流れが悪くなったり、構造物が破損したり、さらに地下水の利用が規制されるなど、この地域の大きな社会問題となっています。

近年 2 なくならない水害

明治改修の後も工事が行われて、洪水の被害は少なくなりましたが、まったく無くなったわけではありません。そのため洪水による災害を防ぐため、今日も工事を続けています。

木曾三川における最近の大洪水		
昭和13年7月	(1938)	梅雨前線により木曾川、揖斐川で大洪水
27年6月	(1952)	ダイナ台風により長良川大洪水。長良川勝賀で破堤
34年8月	(1959)	台風7号および前線により揖斐川洪水、牧田川根古地で破堤
34年9月	(1959)	伊勢湾台風(台風15号)により木曾三川で大洪水。河口部での高潮による破堤、牧田川根古地で破堤

35年8月	(1960)	台風12号および台風6号により木曾三川で大洪水
36年6月	(1961)	梅雨前線および台風6号により木曾三川で大洪水
36年9月	(1961)	第2室戸台風(台風18号)により長良川、揖斐川大洪水
40年9月	(1965)	集中豪雨による越美山系の異状土砂流出(横山ダムにより、洪水を調節)
50年8月	(1975)	台風6号により揖斐川既往で最大洪水
51年9月	(1976)	台風17号および前線により長良川大洪水。長良川安八で破堤
58年9月	(1983)	台風10号により木曾川既往で最大洪水。美濃加茂、坂祝で浸水
平成元年9月	(1989)	秋雨前線により揖斐川大洪水
2年9月	(1990)	台風19号により牧田川、杭瀬川既往で最大洪水。牧田川、杭瀬川背割堤で破堤
6年9月	(1994)	台風26号により牧田川既往で最大洪水
12年9月	(2000)	秋雨前線により木曾川、長良川、牧田川、杭瀬川で出動水位を上回る出水(東海豪雨)

<http://www.geocities.jp/jm2nmd4/index33-4.html>

岐阜 南部

各務原 羽島 岐南 笠松 川島 柳津

各務原

各務原 鏡のような平大地

カガミハラ かがみ ひらだいち

古代 鏡作部が済んでいて各務の地名にとの説も

各務原の各務(かがみ)は もともと鏡のことです
鏡はなめらかな平面に 各々(おのおの)の違いを映し出すのが務め
です だから 各務の当て字をしたでしょう

各務原はかつて各務のともいい鏡野とも書きます 鏡のように
平らかな大地でありました

鏡原の地名は 東40キロ 南北2キロの各務野(鏡野)大地の
古代を示しているようです

実は古い時代 原は原っぱではなく その場所や集落の存在を
示す言葉であったと地名学者は口を揃えます

また由緒は鏡でもべつも説もあります
この地の古社村国墨田神社の祭神は 鏡作部(かがみのつくべ)の

始祖天糠戸命（あめのぬかどのみこと）です
ですから この辺りに古代 鏡作部が住んでいて各務の
地名になったという〈各務村史〉は言います

大宝の頃から明治30年まで1200年間各務郡で
昭和38年に各務原市が誕生しました

平安期には各務郷 江戸期から各務村があり
昭和30年から大字各務となりました

今 各務原市は各務原大地は 航空自衛隊基地や工場用地
それに岐阜市や名古屋市のベットタウン化が進んでいます

羽島

羽島とは 羽栗 中島 一字ずつ

ふたつの郡名は奈良期の文書にあり1000年を超す古い地名である
羽島市や羽島郡の羽島の地名は 羽栗郡の羽に中島郡の島をつけたも
のです

明治30年（1897）にこの二つの郡が合併して一つの羽島郡が
生まれたものです

そして昭和29年（1954）に羽島郡南部の町村が分離独立して

羽島市が誕生しました

羽島郡から生まれた都市ですから 羽島市と命名されました
ですから羽島の地名を知ろうとすれば 羽栗と中島の意味を探る
ことです

この二つの郡名とも すでに奈良期の文書にでています千年を超える
古い地名です

羽島郡は平安期のり国語辞典 〈和名抄〉に波久利（はくり）と読むと
調注しています

もともとは木曾川の水 flow で削（えぐり）とった崖（端）をさす端削（えぐり）
の地からきたと思われま

また 中島郡は木曾川の流の運び出す土砂がたまって
中州ができます あるいは中州と中州の間が埋まって中州間
（なかすま）となり 中島となったようです

今 羽島市 羽島郡は木曾 長良の両川の沖積平野で農業が盛ん
歴史の織物業が生産額は県か最大休息に都市化

戦国時代木曾川が氾濫して 中島が分断され、岐阜側へなったのを
時の権力者羽柴筑前の守が自分の羽と中島の島をとり。羽島と名付
けたとの説もあります。

岐南

岐阜市街 南に伸びる 岐南町街の中央で観戦国道が縦横に
交差し休息な都市神様にいく見せる 羽島郡の岐南町は 岐阜市のすぐ南の
町です

昭和31年に二村が合併して岐南町が成立したとき その地理的位置を町
名にしました

岐阜市と隣接する衛星都市として ともに発展しようとする願いをこめて
の命名です

岐南町は岐阜都市計画地域に入って その96.1%が市街化区域にな
っています

残りの3.9%も市街化調整区域です市街化区域の中でも 住居区域が
38.6%準工業地域が61.4% 全町ぐるみで都市かの様相をふかめ
ています

人口も岐南町成立時の6600人から3倍強に増えています

人口増加は一時は県か1.2位を占めていましたが今は飽和点に近く
鈍くなっています

く) ここは木曾川の流れて土砂などが積み重なった沖積地昔から地味肥沃 (よ
な農村でありました

合併前は羽栗郡の上手 (かみて) にあった上羽栗村と郷社八剣 (はやつるぎ)
神社のある八剣村でありました

今は面目一新の岐南町です 今 岐南町は町の中央で 観戦国道が楯古
に交差し商工業の進出が著しく休息に都市化

笠松

笠松は 土地盛り上がる 笠のむ町木曾川を上り下りする船から見て
はじめ笠町と呼び笠待つとなった

笠松は その土地の形が<笠 (かき) のように盛り上がった松>にいてい
るところからきたようです

<広辞苑>には<枝が四方に広がり垂れて 笠の形をした松をした笠松

という>とあります

<日本地名大辞典>にも<笠松はその地形が 枝が垂れさがった老松に
にていたことによるか>と書いています

つまり地形が笠松に似ていたので 笠松の地名になったとというのです

笠松のとは今から四百年前の大洪水で生まれかわりました

各務原から西の木曾川が川野流れを変えたのです

天正14年(1586)の6月 それまで墨俣で長良川で合流してい
た木曾川が今の流れになったのです

そのころです おそらく木曾川を上り下りする船から見て

<笠のような盛り上がった土地>をはじめ笠町と呼んだでしょう

文禄3年(1594)の文書には笠町となっていて そのあと長寿で
縁起のいい笠松となっています

カサマチからカサマツになったのです 江戸期には笠松村

明治22年からは笠松町です

今は 笠松町は

<美濃じま>織物の原産地であり 現在もさまざまな繊維産業の中心街
十種類類のトンボ天国は珍しく 笠松まつりやその川まつりは岐阜近郊
随一のにぎわい

川島

川島は 木曾川にあるね 中州島(なかすじま)

川島大橋は<天の川のカワサキ橋>

川島は川中志摩です 木曾川の流れで運ばれた土砂がたまった中州
の島です 川野中に川島と笠田の大小二つの島があるんです

川島島のまん中を太い木曾川の本流が横切っています

そこに全長344メートルの川島大橋がかかっています

<いかにも天の川を越えるカワサキ橋だ>と町制要覧

<かわしま>に書かれています

その木曾川の本流と町の南境を走っているな南派川

(はせん)の間には大きな川島があります

そこには昔から小網(こあみ)島 松原島 河田(こうだ)

そして松倉の四つの村がありました

木曾川の本流と町の北境にある北派川の間がもうひとつの

笠田島で そこで笠田村があります

古地図を見ると この五つの村は五つの島になっています
 明治22年 大小二つの島にあった五つの村が合併し
 川島村になりました
 そして明治31年 美しい自然に恵まれた川島町が誕生したのです

今 川島町は
 今は不況で苦しむ繊維加工業と大手薬品産業が町内生産の中心
 面積8平方キロのうち 3.5平方キロが河川敷そこにオオキンケイ
 ギクが繁茂し 松林は県内最大のサギのコロニーとなっている

柳津 (やないづ)

柳津は 楊津 津村 船着き場
 光沢寺裏の船着場に周り二十三尺の大柳があったという
 柳津はその昔 木曾川の川湊 (みなと) であったようです
 今の柳津町のまん中を北から南にへ境川が流れていますが
 古くは 古くは木曾川の本流でした
 天正14年 (1585) のかつてのない大洪水で 今の所に
 流が変わったのです
 柳津は この木曾川の数あるひとつの船着き場であり
 渡し場であったと思われます
 津は湊のことで古記録に<中古は津村という>とあります
 柳津は むかしは楊津 (やないづ) とも書きました
 鎌倉期にここは楊津の御厨 (みくりや) という伊勢神宮領でした
 柳と楊はともにヤナギです 根がよく張るので川の土堤の
 補強に植えられました
 <柳津町史>に<光沢寺裏の船着き場に周り二十三尺
 (約7メートル) の大柳があり>と古老人の言葉が紹介されています
 柳のある船着き場だったのでしょうか
 いや川をせき留めて魚を捕る梁 (やな) も後に柳地名になる例があり
 ます
 梁の見える湊だったのかもしれませんが
 江戸期から柳津村 昭和31年から柳津町です

今 柳津町は
 木曾 長良の間にある穀倉地帯
 特産はイチゴ 近年 大型小売り見せを中心とした商業地区や
 中部圏の核として流通団地が発展しています
 8平方キロ

<http://wikipedia.atpedia.jp/wiki/%E5%B0%BE%E5%BC%B5%E5%9B%BD>

尾張国 とは

尾張国（おわりのくに）は、日本のかつての地方行政区分である国の一つで、東海道の西部に位置する。現在の愛知県西部に相当する。尾州（びしゅう）と呼ぶこともある。延喜式での格は上国、近国。

沿革

7世紀後半以前は、木簡などから、「尾治国」と表記した。また、先代旧事本紀の天孫本紀の尾張氏の系譜にも、「尾治」とある。

室町時代以降では北隣の美濃国とは木曾川を国境とした。この点で現在の愛知県と岐阜県の県境と同じだが、当時の木曾川は今より北を流れていたため、尾張国は愛知県よりは北に広がった。

木曾川は、豊臣政権時代の天正 14 年（1586 年）に氾濫してほぼ現在と同じ流路を流れるようになった。

現在の木曾川は岐阜県羽島郡笠松町付近まで西に流れ、そこから南に流れの向きを変えているが、天正 14（1586）年 6 月 24 日のいわゆる「天正の大洪水」以前はさらに西に流れ、墨俣（現在の大垣市墨俣町）付近で長良川と合流していた。現在の境川が木曾川の旧流とされている。

「天正の大洪水」によって葉栗郡と中島郡が新しい木曾川によって分断され、新流西岸は美濃国に編入された。そのため、愛知県側と岐阜県側に同じ地名が今もいくつか残る（例：愛知県一宮市東加賀野井と岐阜県羽島市下中町加賀野井）

愛知県西部にありながらずっと尾張国に属さなかった地区に、現在の稲沢市祖父江町の一部、一宮市東加賀野井、一宮市西中野などがある。これは令制国の廃止後に、市町村の境界変遷で所属する県が移ったものである。

歴史

尾張地方は奈良や京都に近いため、神話や歴史においても畿内色が濃い。易林本の節用集によると、尾張国は肥沃（地厚土肥）な大上国とあり、その富裕な生産力を背景にして、京都と深い交流が続いていた。

日本神話

日本神話での尾張国は、ヤマト王権の領土としての様子が綴られている。尾張国の代表的神社である熱田神宮は、三種の神器の一つ・草薙剣（天叢雲剣）を祭っている事で有名である。倭姫命や伊勢神宮に関わる国には、尾張国が含ま

れている。

古代から平安時代まで

国造が分立した時代には、尾張氏の勢力圏に属していた。しかし、律令制が敷かれると、令制国の尾張国の範囲となり、防人の通行路にもなった。

又、「尾張」の発音が「終わり」と重なる点からも判るように、「端っこ」と見なされていた。この「尾張」に類する地名には「熊野」があるが、こちらも発音が「隈の」（奥まった所）に通じている。

幕府の時代

戦国時代から安土桃山時代まで

特に戦国時代になると、京都に近い尾張国は、織田信長（清洲に本拠地あり）と豊臣秀吉（名古屋出身）といった大物武将を出し、織田信長や豊臣秀吉の領土に入った。

この外にも、尾張国出身の武将としては、柴田勝家、前田利家、池田輝政、山内一豊、加藤清正、福島正則、蜂須賀正勝、堀尾吉晴、浅野長政など、多くを輩出している。

江戸時代

江戸幕府が樹立されると、尾張国からは織田・豊臣の勢力が一掃され、新に尾張徳川家が治める尾張藩の領土となった。尾張藩は62万石の石高を持ち、その城下町（地方王国の首府）たる名古屋は、日本で十指に入る都会となった。尾張藩は陶磁器を独占産業として位置付けたため、その名残で、瀬戸は陶磁器の街になっている。

東京政権の時代

明治から第二次大戦まで

明治維新で中央集権国家が形成されると、名古屋は明治政府による地方支配の拠点都市となり、現在に至っている。又、鉄道敷設などの近代化政策が進められた頃、尾張一宮は織物産業の中心地として栄えた。

第二次大戦後

高度経済成長期には、尾張地方は政府の施策で重化学工業の中心地に指定され、中京工業地帯が造成された。

律令制の行政機関

（国府、守護所、総社、一宮、国分寺）

国府は中島郡にあった。地名を手がかりに、2箇所が候補にあがっている。1つは稲沢市松下及び国府宮（この2つは隣接している）の双方に国衙という小字があり（現在は松下n丁目、国府宮n丁目）、近辺が推定されている。数度の

発掘調査が行われているが、木簡や銅印などは出土しているものの、遺構は発見されていない。又、もう1つは稲沢市下津町に東国府、西国府の小字があり、近辺が推定されているが、発掘調査は行われていない。

易林本の節用集では、海部郡に府と記載があるので、守護所の萱津（海部郡甚目寺町）と思われる。

鎌倉時代の守護所の位置は不詳だが、將軍の宿泊地に必ず萱津が当てられ、守護はその接待をした事からその近辺だという説がある。いつ頃からは定かでないが、室町時代には下津（稲沢市）にあった。

延喜式神名帳には大社 8 座 8 社・小社 113 座の計 121 座が記載されている。大社 8 社のうち 4 社は愛智郡の熱田神社（現 熱田神宮）とその摂社 3 社である。他の大社は以下のもので、熱田神社も含め、全て名神大社に列している。

中島郡 大神神社（一宮市）
中島郡 太神社（現 大神社、一宮市）
中島郡 真墨田神社（現 真清田神社、一宮市）
丹羽郡 大県神社（犬山市）

一宮は一宮市真清田の真清田神社である。1165 年の史料に、既に真清田神社が一宮として記載されている。一宮市の大神神社という説もあり、大神神社の社伝では真清田神社・大神神社の両社が相殿として一宮とされたとしている。十六夜日記に、一宮といふやしろ、と記載される。

二宮は大県神社で、1143 年の史料に記述があり、一宮もこの頃定まったと考えられる。三宮は名古屋市の熱田神宮である。古代からの大社である熱田神宮が一宮にならなかった理由は、当初、伊勢国における伊勢神宮と同様に別格で一宮とされなかったが、一宮・二宮が定められた後に三宮として追加されたという説、単に国府から遠かったためとする説もある。四宮以下はない。

惣社は尾張大国霊神社である。

国分僧寺は、最初は現在の稲沢市矢合町椎ノ木に置かれた。伝承に基づいて発掘調査を行った所、塔跡と金堂跡が発見された。日本紀略に火災があり、そのため、定額願興寺を国分寺としたとある。その定額願興寺の所在地として、名古屋市中区正木 4 丁目が比定されている。その後衰退して廃寺になっている事から、その後に国分尼寺が僧寺に転用されたという説もある。中世以降の国分僧寺については不詳。国分尼寺は稲沢市法花寺町と推定されている。法花寺町の法華寺がその名残とする説がある。